UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

59

GAPニューズレター　第59号目次

〈巻頭言〉烈　日 ---------- 1

進歩した思索家のために(完) ---------- ジョージ・アダムスキー　2

生きた細胞の驚異 ---------- ラザフォード・プラット　5

透視力開発と宇宙観 ---------- 亀田一弘　7

米国GAP本部訪問記(完)

ＹＹＹＹＹＹＹ 第３部 さらばニューイングランド -----久保田八郎--11

透視された謎のクリスタル・ペンダント ---------- 中里信彦　34

〈写真〉記念すべきフェニックス・ガゼット紙 ---------- 36

月例研究会案内 ---------- 40

編集後記 ---------- 41

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。

ＧＡＰとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて〝コズミック・パワー〟の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

１．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。

２．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。

３．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

今年は地震と異常気象の当たり年ではないかと思われるほど大地震が世界各地で発生し、狂気じみた異常気象の直撃を受けている。マグニチュード七以上が大地震の部類に入るが、六以上をざっとみると、中米グァテマラ（二月四日、M七・五）、北イタリア（五月七日、M六・八）、中央アジア（M七・二）、ニューギニア（六月二十六日、M七・二）、パナマ・コロンビア（七月十一日、M七）、インドネシア・バリ島（七月十四日、M七・二）、中国・唐山（七月二十八日、M七・五）と並び、本稿を書き直していた八月十七日にはフィリピン南部ミンダナオでM八の大地震、前日の十六日には中国四川省と山西省でM七が発生したし、カリブ海のフランス海外県グアドループのラスフリエール火山が同日午後九時半（日本時間十七日午前十時半）に予告どおり大爆発した。一月はブラジルに猛暑が襲い、七十三人が死亡、フランス東部は零下二十五度の極寒、モスクワは百年ぶりの零下三十八度の寒波、ヨーロッパ各国は数百年ぶりの酷暑に襲われ、英国は二百五十年来の大旱魃、フランス全土の三分の二も旱魃で水不足。六月はバングラデシュで大洪水、五百万人が被災、東日本は九十一年ぶりの異常低温、お蔭で人一倍暑がりやの編者は大助かり——。

あまりに異常なので気象庁の地震関係調査機関へ電話をかけて、昨年度までの大地震発生状況と今年現時点までのそれとを比較した増加率その他を質問したら、係官は話をボカして具体的な回答を避けた。おかしな話である。

カタストロフィー（破滅的大変動）の発生説が流布している。エドガー・ケイシー、ノストラダムスらの予言が正当化されて話題のタネとなり、一九八二年の惑星直列現象がこれらの予言に結びつけられ、輪をかけた噂となって拡がってゆく。

しかし物理的にみて恐るべき事態が発生する可能性があると東大教授・飯島重孝氏は言う。それは地球の軸の傾きである。異常気象が極運動に影響を与えているというのだ。ア氏がこの事実を指摘したのはかなり以前で、当時はバカにされたが、もう科学界でもこの現象の発生を重視している。しかも異常気象が続くと食糧不足となり、飢餓状態は必然的に大戦争をひき起こす。もはや地球上どこを見ても安全な避難場所はない、と思われるほど事態は深刻になっているらしい。だからノスさんの予言詩は的中しているのだと、またも恐怖と不安に満ちた新説が巷間に流れてゆく。

恐怖とは何か？　世紀の哲人クリシュナムルティーによれば、それは外海よりも自己の何たるかを知らぬために起こる心の混乱状態であるという。そこで人は他人との同一化を目指し逃避を求めようとする。この同一化は真の意味の万物一体感ではなく付和雷同であり、多数化による力の誇示への憧れである。「よらば大樹の下」である。しかし大樹は必ずしも健全ではない。内部は腐って空洞化しているかもしれない。〝衆愚〟に対して同一化しても所詮自分が愚者になるだけである。恐怖、不安、憎悪、悲痛、猜疑、陥穽等の渦巻く地球世界で、独り清純な境地を維持するのは容易ではないが、大衆から離脱すれば孤立して生活は困難となる。

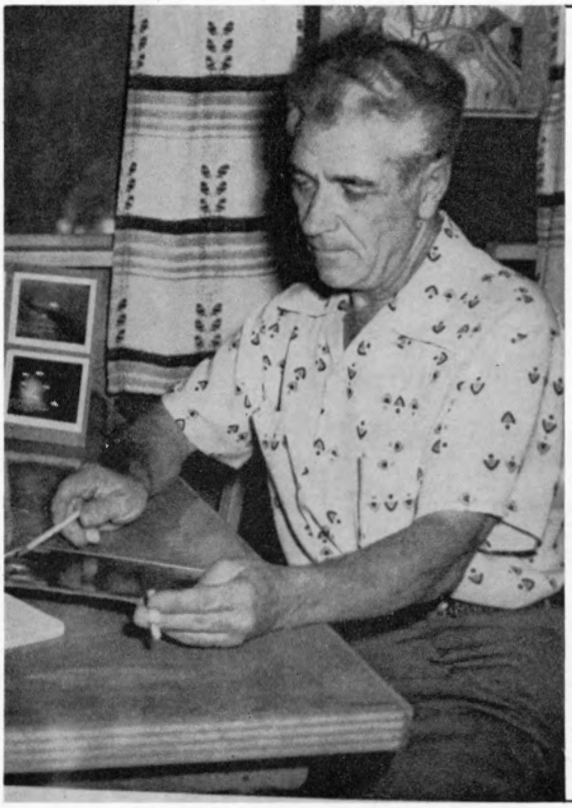
衆愚と同一化しないで、しかも孤独を排除する唯一の方法は何か？　それは「愛」にあると思われる。執愛にあらずして法愛である。盲目的なお人好しにあらずして英知ある親切である。それは「相手が救われるとともに自分も救われる」と確信した愛であって、感傷的な犠牲的精神ではない。「わたしはあなたを愛するのが遅すぎた」と〝真理〟に対して歎息したオーガスティンの内奥には、創造パワーに対する限りない憧憬が秘められていた。この宇宙のパワーは英知であり、意識でもある、とア氏は言う。それでマインド（心）をこのパワーに限りなく近づければ、自己の悪しきカルマも次第に清算の方向に進むと考えられるのである。

内部に宿る宇宙の意識がマインドを通じて表面化すれば、豊かで親切で美しいのであるとア氏は説く。これは要約すれば〝柔和〟である。凝り固まったエゴよりも穏和な愛が強い響として、堅固なコンクリートのビルが案外脆くて、しなやかな木造家屋が残った新潟地震が想起される。強固な物は折れることがあるが、柔軟な物は曲がってまた元へ戻るのである。

大地震や異常気象等の天変地異が続くと人間の頭もおかしくなるらしい。近頃はUFOの分野も百鬼夜行の観を呈してシッチャカメッチャカな状態になってきた。捏造が流行し、自称コンタクトマンが続出する有様で、真実と虚偽との区別が困難となり、これにつけ込んで円盤ゴロが暗躍する。そこでも大衆の同一化現象が発生し、どこかに存在する筈の真実は片隅に追いやられることになる。

しかし一方でこの世界の〝大掃除〟が接近しつつあるとすれば、何を騒いでも始まらない。すべては水漬くカバネとなるだろう。自然のカタストロフィーが起こらなくとも食糧飢饉で大戦争が勃発するかもしれない。どの道この世界は安全ではないのだ。早いところ大母船に乗って別な惑星へ移住したいが、そう簡単に乗せてはくれぬ。しばらくは陋屋で暮らすより他に手はない。となると、せめて〝大掃除〟までは何としてでも身の保全を図らねばならぬ。といってオカネが保障してはくれない。大金が災害よけの防壁になるわけではないのだ。

どうすれば平安に暮らせるか？　こいつはむつかしい問題だ。いくら考えても名案は浮かばない。仕方がない、寝転んで本でも読もう。プラトンの「饗宴」にするか、カントの「純粋」か「実践」か。いや、〝脱地球〟を望むのなら優良宇宙人関係の本がよさそうだ。



進歩した思索家のために（完）

ジョージ・アダムスキー

大掃除は始まっている

問　レムリア人はどこから来た民族ですか？

答　レムリア人はまだ地球上に再度の定住をしていません。今日、地球にはレムリア人は存在しません。現在の文明が消滅して、新しい時代に入ったときか、または地球の完全な傾きが発生して大カタストロフィー（破滅的な大変動）が生じたあとで、またやって来るかもしれません。このような大変動は二万六千年ごとに発生し、海底の土地を隆起させ、今人間の住んでいる土地を海底に沈下させますので、無数の人間が土地とともに海の墓場へ沈んでしまいます。そのあとでレムリア人が来るかもしれませんが、だれにもわかりません。トリトン人はもう地球へは来ないでしょう。この民族は地球であらゆる民族に先行して住んだ種族です。彼らは地球に大空が見えるようになって、ガンマ線が宇宙を貫いて降り注ぎ始めたとき、地球を離れました。地球人の寿命が短くなったからです。メトセラ（訳注＝創世紀五・二七に出てくるノアの洪水以前のユダヤの族長）は九百六十九歳まで生きましたが、その頃から人間の寿命は短くなり始めたのです。そのような時代は地軸の傾きによって復活する可能性があります。しかもその傾きはすでに起こりつつあるのです。そのために多数の生命が失われるとすれば、それは無知のためです。

問　二万六千年周期で大変動が発生するというのは、如何なる根拠に基づくものですか。

答　科学が推測し得る限りでは――の話です。イエスの時代の周期はいつ終わったか知っていますか？　それは一九三九年です。それが二千年周期の終わりなのです。多数のキリスト教徒はいまだに新しい周期が始まるのを待っていますが、二千年周期は一九三九年に終わったのです。ベツレヘムの星はイエスの誕生のシルシだったといわれていますが、あの星は二千年ごとに一度三個の星が三ヵ月間完全な合になる現象です。それで肉眼には一個の星のように見えるのです。一九三九年に天文学者連はそのベツレヘムの星が米西部海岸に出現したのを見ました。当時、人々はこれは地球を焼け尽くすのか、または氷河時代が来て地球を凍らせるのか、それとも戦争が始まる恐ろしいシルシではないのかと言っていました。すると第二次大戦となりました。現代のそれとは異なる天文暦によりますと、今年は一九五五年ではなくて二〇一五年だということです。聖書で予言された世界の混乱について、みなさんは理解できるでしょう。それには、この周期の終末に全世界が混乱状態におちいり、あらゆるものが滅亡して新秩序がやってくると述べてあります。言い替えれば、新しい家具を入れる前にまず家の大掃除をする必要があります。そしてこの事が現在発生しつつあるのです。新しきものが古きものにとってかわり、それが我々の生活の一部になるのが完全に実現するまでには数十年を要するでしょう。私たちはすでにこの新しい〝天の摂理〟に入っ

てから十五年になります。今やきびしい試練の岐路にあります。人間が忍耐強くなり、大自然に道をまかせるならば、かつてない最高の栄誉を受けることになるでしょう。短気になればもっと多くの核爆弾を爆発させて、すべてを破壊するでしょう。

人間は電気エネルギーの現れ

問　他の惑星から来る宇宙船の作動に際して発生する波動については？

答　波動は地球自体の粗い作動の最も粗い段階から、人間の心では知覚できない永遠の状態に至るものまで、各種の段階があります。しかもそのあいだに分離はありません。人間の心から出る考え方にも粗雑なのから精緻に至る段階があって、次第に高次になるのと同様です。我々は未来に感知できるかもしれない波動の十分の一さえもまだ感知していませんが、それでもエレクトロニクスの分野ではかなり発達しています。

他の惑星の宇宙船が充分に作動しているときは、六万ないし七万メガサイクルの放射線を出します。静電気は〝運動していない速度〟ともいうべき電気エネルギーです。それは運動しているのですけれども、いわゆる運動ではありません。なぜなら静止しているからです。磁気は推進エネルギーです。静電気を利用するにはそれを推進エネルギーすなわち脈動状態に転換させる必要があります。光は電気エネルギーの別な現れにすぎません。万物はすべてそうです。人間もそうなのです。人間も電気エネルギーの現れの一例です。人間の脳の中だけでも約四万個の微小な細胞がありますが、これらは懐中電灯の電池のようなもので、電気的な脈動に基づいて作動する電気のユニットに似ています。しかし我々には電気の正体については実際にわかっていません。電気とは万物の生命の根源であり、したがってそれは〝活動している神〟だともいえます。だから人体内部に高圧電流を流すと死ぬのです。六ワットの電球に百二十ワット分の電力が相当しないのと同様です。しかし百二十ワットの電球を作ることもできます。**人間の場合も、脳細胞がもっと多くの電気を取り入れることが可能になるように発達できるのです。これが真の発達です。これは人間が避けることのできない絶対的な法則です。**人間は全宇宙を化学の分野にあてはめて、宇宙とは活動する化学作用にすぎないということを知ることができます。なぜなら電気とはまず第一に化学作用であると言えるからです。現象のどんな段階でも、自分の心で感知し得る最小の物にまでその化学作用を認めることができます。如何なる場合でも、あなたがたは同じ力、同じ量の力が存在することがわかるでしょう。物体が微小だからといって、その力を減少させるわけにはゆきませんし、巨大な物だからといって、その力を増加させるわけにもゆきません。

問　パワーは大気圏外から来るビームから集められるのですか。

答　それによって宇宙船を作動させることができます。それは（光）は電気エネルギーであるからです。電球に電流を流しますとエネルギーを光に変えることができますが、エネルギーを光に変え得るものなら、逆に光をエネルギーに変えることも可能なはずです。フランスは遠からずある装置を開発するでしょう。これは他の惑星から来る光線をキャッチしてテレビのように画像に転換できるものです。そうすれば他の世界の人間、樹木、生物などが再現できるでしょう。各周波数の放射線を分離させて異なる形にするのです。この種の装置はすでに開発されつつあって、フランスで遠からず実験されることになっています。実現すれば他の惑星に人間が存在する事実が立証されるでしょう。

月面には都市がある

問　月には我々と同じような人間が住んでいるのですか。

答　住んでいます。八ヵ月前に出たブルー・ブック誌には、月面に〝建築ブーム〟が起こっていると述べた多数の一流天文学者の記事が掲載してあります。この百年間、月面上に絶え間のない変化が発生したとか、多くのクレーターに強烈な光が溢れたり宇宙船らしき物が動くのが見られたというような情報が出ています。シカゴ・アメリカン紙は数ヵ月前に、長さ四百キロメートルの大宇宙船が月面上に観測されたという記事を掲載しました。

問　月は地球と同じ成分で出来ているのですか。

答　そうです。あらゆる惑星・衛星はすべて同じ成分で出来ています。人間は変化によって進歩します。人間は自分が言った事をかつては遂行できませんでしたが、今は行っています。そして現在はできないと言っている事を未来はやるでしょう。みずから月へ行くように――（訳注＝たしかに人類はその後、月へ行った）。かつて人間は馬がなければ旅ができないといわれましたが、今は自動車があります。それでも人間はやはり万事を知っていると思っているのです！　人間は互いにだれをも尊敬し合っていません。まだ生まれてもこない幼児をさえも尊敬していないのです。私たち人間は全体として生きているということを少しでも考えてみたことがありますか？　人間はまだ生まれてもこない幼児の労力によって生きているのです！　現在の米国の負債を考えますと、幼児が出生するごとに彼らは二千五百ドルの負債を背負うことになります。いまの米国民が如何に貪欲であるかがわかるでしょう。米国民は自分の負担を少しでも軽くしようとしてまだ生まれてもいない子供たちに負債を押しつけているのです。米国民はエゴにもとづいて自己保全を図りたいばかりに未出生の幼児を奴隷市場に売り渡しているのです。

問　パロマー天文台の二百インチ望遠鏡は、月面の異常な物をキャッチしていますか。

答　ええ、すばらしい写真を撮影しています。私は一九三八年に月面に存在する都市を自分の望遠鏡で撮影しました。さほど大きな都市ではありません。

問　しかし、そんな写真類は全然発表されていないではありませんか。

答　そのとおりです。私はパロマー天文台の学者たちと議論しました。そこにジョンソン博士がいた頃、天文台へよく行って言ったものです。「私は月面の美しい湖の岸辺に都市（複数）があるのを見ましたよ。その湖で人間が泳いでいましたね（訳注＝これは冗談で言ったもの）」すると科学者たちは私をバカにしましたが、結局、彼らも同じ物を見たと告白しました。

問　あなたは月面へどれくらい接近したのですか。

答　約千五百メートルです。

問　二百インチ鏡は電子工学的に操作されるのですか。

答　あの望遠鏡は二年前に性能が疑われたために、科学者団はある電子工学的な装置を取り付けています。オーストラリアのボーン博士がパロマー天文台へやって来て、あんたらはときどき九千万光年も誤差を生じていると話したのです。博士によると、夜空に見える銀河の尻尾と頭は、その電子装置の結果次第では全く逆になっているというわけです。つまりアンドロメダなどは実際は反時計方向に動いているのに、時計方向に動いていると言われていました。私たちが教えられてきた知識は正しいと思われていたのに、今は多くの物事の反証が出ているわけです。天体間の距離も一般で考えられていたほど大きなものではありません。一光年というのは――（訳注＝以下、タイプの誤打と思われる意味不明の語があるので、翻訳は不可能である）。

問　土星の輪の実体は？

答　あれは大気中のチリの微粒子でできたものです。地球もまだその一部分を持っていて、これはジェットストリームと呼ばれています。方法さえわかれば、このストリームに旅客機を乗せて半ガロンの燃料だけでロンドンに行けるでしょう。しかしストリームに乗る時機を誤れば、機体はバラバラになります。

問　大気圏外から地球はどのように見えますか。

答　ちょうど月に似た光球に見えます。ただし約十二倍の大きさに見えました。しかし白光というよりも少し黄色光を放っています。私がながめた距離から見れば、その地球に〝悪魔〟が住んでいるとは思えません。月と同様に全くなめらかです。そう、月には人間が住んでいます。彼らは他の惑星から移住してきました。この宇宙の惑星はみな人間が居住したことがあるのです。

問　月面の人間は地球と同様に自然に進化するのですか、それとも突然にそこへやって来るのですか。

答　もとは別な惑星から来たのですが、現在はそこで生まれた子供たちもいます。

問　そうすると月は若い天体ですか。

答　地球と同じです。

問　私は人間の居住の歴史の点を言っているのですが――。

答　ずっと人間が住んできました。地球に人類が足跡を印して以来、宇宙船が地球の周囲を動いてきたことを忘れてはいけません。地球人が何かの放射線を発射したり、狂気じみたり、自己破壊をしそうになったりすると、彼らはやって来ます。旧約のエゼキエルを注意深く読まれれば、よくわかります。人間はアダムの前に警告を受けました。この警告を注意していたら自分を救えたでしょうが、そうしなかったために昔の歴史を繰り返しています。

問　あなたは先ほど太陽系について話されました。太陽が中心にあり、このような太陽系は他にもあって、多数の太陽系の中心にも結局、中心となる太陽があるということでしたが――。

答　そうです、その構成はこういうことなのです。十二個の惑星が一単位を構成します。九個はすでに大衆に知られており、第十番目は二年前に発見されました。一九四九年に私は、ある一定の距離内に十番目の惑星と十一番目の惑星が発見されるだろうと書きましたが、私が予告した距離の二マイル内誤差で十番目が発見されました。しかし天文学界では徹底的に確証するまではそれを公表しないでしょう。それには通常十年を要します。

× × ×

（10頁より）私の言う慈悲とは、この自然界のスベテのモノをして、そのモノらしく存在することを善意を持って見守ることである。また、人のいやがる事、人がやりたくない事は人にさせず、自身でするように心がけ、人をそしる事をしないように心がけて努力している。

（6頁より続く）

の符号をおびているのである。

ＤＮＡは細胞の指令者で細胞内の他のすべての化学成分を統制する。細菌から象にいたるまで地上のあらゆる生命形態は、細胞内にＤＮＡをもち、それが細胞の全活動を支配する。

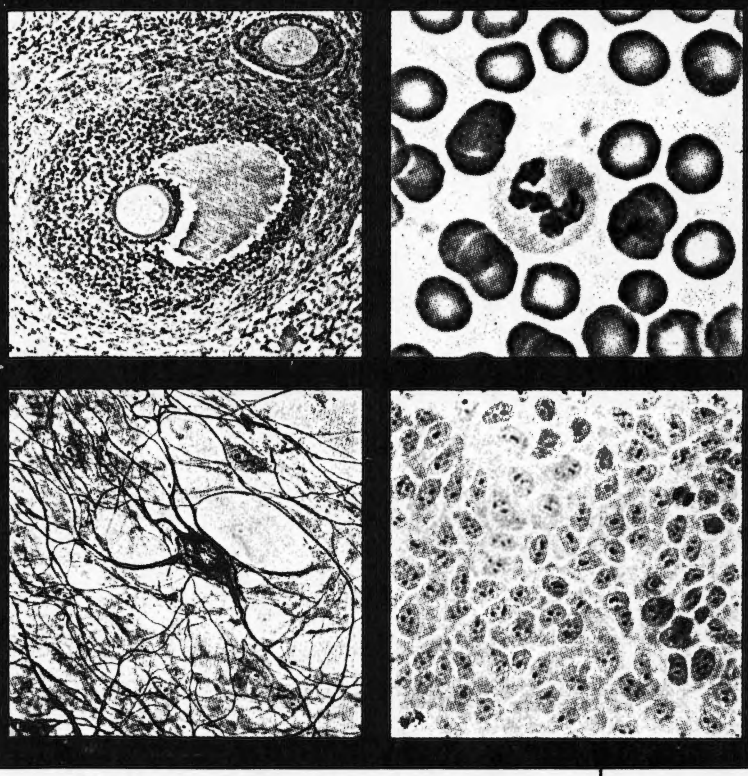
超自然的な通報送達者　ＤＮＡは驚嘆すべき「送達者」の機構で支配し、細胞の全構造を創造し誘導する。リボ核酸（ＲＮＡ）と呼ばれるこれらの送達者は、外見も作用もＤＮＡによく似ているが、核を離れる外出許可証を持つことだけが異なる。まず支配者のＤＮＡと送達者のＲＮＡとがもつれあい、両者のテープがしっかりとからみあう。電子的な速さで、ＤＮＡは符号の一部をＲＮＡに刻印する。ついでＲＮＡはとび出して細胞の勢力範囲に行き、符号はいろいろな酵素につぎつぎに伝達される。各酵素に対して特定の仕事をするための明確な指令を出す。細胞内の何かをつくる働きをせよとか、他の細胞に行けとかいうように。すべての細胞内のＤＮＡがおたがいに話しかけるのは、ＲＮＡを通じてである。どのようにかして、彼らは協調を保ち、幾十億という細胞の大きな固まりの外見や働きが犬や馬や象や人間となるのである。

これら最近の発見は大きな期待をいだかせるものである。未来の人々はわれわれの宇宙時代を回顧して、内部宇宙――生活細胞の深部――の探求こそ、宇宙飛行士の功績よりも人類にとってはるかに重要なものと見ることであろう。

生きた細胞の驚異

ラザフォード・プラット

アダムスキー著「生命の科学」114頁に1964年8月号リーダーズ・ダイジェストの記事の一部が引用してあるが、重要な科学論文なので、日本RD社の許可を得て全文を掲載することにした。同社に感謝するとともに、早大図書館で資料を発見して本会に提供された会員・浜村達郎君に謝意を表する次第である。



●左上　ウサギの卵胞。右上　人間の血球細胞。
左下　サルの神経細胞。右下　子宮ガンのガン細胞。
（平凡社刊「世界大百科事典」12巻より。転載許可済）

学者たちは細胞が歩くのを見た――それは全く魂を奪うような芸当だった。仲間から離れた細胞は、生気もなく受動的に浮遊していたが、しまいに一つの細胞が偶然容器に接触した。すると突然、その細胞はその壁面をよじ登りはじめたのだ。

時代は三十年以上も前のことで、学者たちが見詰めていたのは、「組織培養」の初期の実験であった。組織培養というのは、細胞を滋養液体内に浮遊させて身体外で生かしておくテクニックである。これらの実験で――そして多数のもっと最近の実験で――科学界が長い間想像していた事柄が確実に立証された。すなわち、生体を形作る幾十億という細胞は、一見、簡単な、定形のないゼリー状小塊とは、似ても似つかぬもので、きわめて複雑な実在物であり、一つ一つがこの世で特別な使命をもち、その使命を遂行しようと懸命に努力しているのである。

たとえば胎児の新鮮な若い皮膚から採った細胞は、ガラスなどに触れるとふくらみを出す。ふくらみは細長く伸びて、細胞が進みたい方向へ腕を差しのべたようになる。腕の先端は平たくなり、ガラスにへばりつくと、ゴムひもがちぢむように縮んで、細胞の他の部分をひっぱりよせる。この作業はくりかえされ、また別のふくらみがガラス上の別の場所へ伸びてゆく。このようにして細胞は休みなくどんどんはいつづける。ちょうど体内で細胞が形作られた内層から皮膚の表面まで遊走しつづけるように。それは試験管内ではあっても、細胞は体内の定められた部位へ到達しようと努めているかのように見える。

不思議な膜　このような実験は、生きている細胞に対する好奇心を強めた。単なる無定形ゼリーの小滴だったら、そんな目的感をもった運動を遂行することはできないはずだ。ますます強力な顕微鏡が細胞の深部をさぐるにおよんで、ぼんやりした影やはん点が見えてきた。徐々に焦点が合わされ、分布も正確に捕らえられ、細胞の驚くべき構造が明らかになってきた。

最近のどえらい発見の一つは、細胞の表面に関するものである。この表面は従来「半透性」膜で、これを通って水にとけた食物や鉱物質が徐々に浸透するが、有害な物質はさえぎられると考えられていた。

細胞学の最近の報告によると、細胞の表面は単なる薄い膜ではなく細胞の顔ともいえるものである。それは味や臭気に関し化学的な感覚を持つかのように振舞い、好きなものを好きなときに取り入れることができるという。

ある学説によると、細胞の表面は四層から成り、脂質の二層が蛋白質の二層の間にはさまっている。二つの脂質の層はゴムの裏張りのような働きをする。外層と内層にある複合蛋白質は協力して、適切な供給物が脂質の層を通過するようにする。

強力な電子顕微鏡を用いて、学者たちは最近、外側の蛋白質層の一部が指状の形になり、それが伸びて、水の小滴や必要な化学物質の固まりに迫ることを発見

した。小さなくぼみが形作られ、ついで内部に向かって伸び、付近から捕らえられた化学物質は、あわにはいったまま脂質の層を通過させられる。このようにして細胞は栄養分をのみこむのである。

細胞間空間からの声　細胞膜に関するもう一つの興味深いニュースは、その表面に酵素が豊富なことである。（酵素は一種の触媒で、ある化学変化をひきおこす）酵素の一部は、多分それが付着している細胞の所産であるが、大多数は、他の細胞からやってきたばかりのものである。

これらの他からやってくる酵素は、細胞の間の空間を横切って呼びかける他の細胞の声であり、身体の部分をつくるために集まった幾百万という細胞が、歩調を合わせて分裂増殖し、それぞれの位置を占め、特殊な形をとれるように、通報を交換する。多くの呼びかけは、すぐ近くの細胞から行われる。それは、肺、筋肉、眼瞼などいろいろな部分での局所の仕事に関するものである。このような呼びかけの効果は、心臓組織からの細胞をばらばらにして組織培養するときに観察される。心臓の細胞は最初は何の反応も示さないように見える。だが二、三分たつと、一部のものは、わずかに搏動し始める。ついで、その細胞は、おたがいに接近を開始する。数時間後にはいくつかの集団が形作られ、それぞれの集団の細胞は、同調して搏動する。酵素で伝達される局所通報が、何かまだよくわかっていないが複雑な化学的方式で、これらの細胞に本来の単一体と自分たちの基本的任務（心臓をつくること）を思い出させるらしい。

長距離の呼びかけも移動する酵素によって行われる。このような「小馬速達便」酵素の中には、いくつかのホルモンもあり、血流によって離れた部位へ運ばれたり、遠方からやってきたりして、成長、消化、あるいはなにか他の大切な活動を促進したり抑制したりする指令をもたらしている。

目に見えない迷路　「原形質」といえば、細胞内部のゼリー状物質を一括した科学的名称であった。つい六年前（一九五八年）までは、原形質は一種の物質の小塊で、中で分子がでたらめに渦を巻いてぶつかり合っていると考えられていた。ついで、そんな状態ではないという最初のヒントが得られた。細胞の核の近くにわずかな網状構造が発見されたのである。これは内質網状組織とか「原形質内網状構造」と名づけられた。電子顕微鏡でもきわめてかすかで消失しやすく、実在するかどうか疑問視されたほどである。だが、昨年になって、ニューヨークのロックフェラー研究所のジョージ・E・パレード博士は、細胞の内部には信じられないほど細い管やきわめて小さな袋の連鎖がとほうもない迷路をつくっていると報告した。パレード博士の発見は画期的な出来事で、それによって、原形質は宇宙におけるもっとも美しい構造物の一つだとわかった。細胞は非常に手のこんだもので、自然は細胞をつくりだしたときに、仕事の大半をすでになし遂げたといってもよい。その後の仕事は、単に細胞をよせ集めて、魚や鳥や馬や象を——人間さえつくるだけであった。

内質網状組織の本態が明らかにされるとともに、原形質の「混合鉢」説はくつがえされた。分子は細胞内ででたらめにぶつかり合うのではない。生命の要素は内質網状組織の迷路を通って、誤りなく秩序のある協調のとれた様式で推進され、迷路の小さな管や袋は、あらゆる方向に伸び各部を連絡している。

内質網状組織は、供給物を細胞の各部にはこぶ運搬系だけなのではない。消化管の役目もする。細胞の膜が食物を捕らえると、それは内質網状組織の水路内へおしこまれ、中間駅に送られて、そこで蛋白質、炭水化物、鉱質などが処理され貯蔵され、用に供される。内質網状組織が細胞の仕事を遂行するさいには、絶えずふくらんだり、ちぢんだり、ちぎれたり、再建されたりする。

細胞の曲がりくねった屋根裏部屋　内質網状組織系は外界と連続している。その管は直接細胞の膜に達し、そして外に通じている。内膜網状組織迷路の間の空間は、本当の細胞内部で、大きな屋根裏部屋を形成し、主として貯蔵に用いられるが、他にも数えきれぬ役目をもっている。この屋根裏部屋は、内質網状組織迷路と交錯しているので、曲がりくねった形をしている。その空間のかなりの部分は空胞で占められている——空胞は水、油、または液状食物を含む貯蔵所である。また、内部区域のいたるところに、多くの黒ずんだ糸状および粒状のもの——ミトコンドリア（糸粒体）が散在している。最近、これらの粒子は研究の力でこじあけられ、強力な発生機を内包していることがわかった。それはアデノシン三燐酸という力強い化学的燃料であることも明らかにされた。アデノシン三燐酸は筋肉細胞の収縮、活気にみちた細胞を完全に保つ絶えまない生成、復旧など、あらゆる細胞活動に動力を供給する。

ぼう大な曲がりくねった細胞の屋根裏部屋は、またいろいろな酵素の本部であり、その酵素は生成作業の多くを促進する。酵素の一部は自家用で、積みかさなった固まりからたえずはがれて、細胞内部の各処に特殊な任務をもって離れてゆく。この酵素は自分の細胞の固有な活動の指令をおびている。

ある学説によると、他の酵素は輸出用である。つまり、内質網状組織の管を通り細胞の外へも到達する。これらは「移動する酵素」となり、他の細胞へ呼びかける細胞の声となるのである。

生命の符号　酵素に指令を与えるものは何か？　酵素は長い命令系の連鎖の末端で最終的の作用をつかさどるものと見なされる。この命令系をさかのぼると、各細胞の核にある不思議な生命符号に達する。

十年ほど前に、学者たちは細胞の核内に突入し、デオキシリボ核酸（DNA）という驚くべき獲物をひきだすことができた。各細胞の核はDNAのくるくる巻いたひもを体内に持っていることがわかった——繊細なテープ状の分子で、磁気テープが音楽を録音しているように生命

（4頁下段へ続く）

「透視力に関する一冊の小型本が眼についた。それは体を止めた位置の直前にあって、まるで私がそこへ来るのを待っていたかのようだった」と本誌第56号21頁に編者が記しているが、それは「透視術入門」という著書である。著者の亀田一弘先生は世に知られざる大透視能力者で、昭和二年に透視力を開発されて以来、その偉大な能力によって約五十年間無数の人を助けてこられた。人格高潔、古今の宗教哲学に通暁し、博学多識の先生は、八十歳の高齢にもかかわらず今もなお鬢鑠として、そのすごい透視力を応用しながら悩める人々の人生相談に応じておられるが、本号には、かねてより折にふれて先生から編者に贈られた随想原稿の内、一部分を抜粋の上、掲載することにした。短篇ながらもこの深遠な哲理は読者に裨益するものと確信する。

なお、先生著「透視術入門」に関し、また先生より人生問題で直接助言を得たい方に対する詳細は本号43頁の記事を参照されたい。

透視力開発と宇宙観

亀田一弘

●大脳神経の触感を鋭くすること

万物の霊長であるとしても、やはり人間は哺乳動物であることを自覚しなければならない。この地球上の自然界の哺乳動物は勿論、虫類、魚類、鳥類でさえもその祖先達の生きるための体験のうちのスバラシイものを代々積み重ねて遺伝されて生まれ出て来ている。それが我々人間から見れば不可思議な働きに見え、そこに自然界を統べるところの神をさえ想像したくなる程である。

永年昵懇にしている加藤泰基・医博から「これを読んでは」とKKベストセラーズ社版、伊藤政顕著「動物の超能力」という本を頂いた。つまり虫類、魚類、鳥類等の本能的とみなされるところのいろいろのハタラキを説いている。かねて私がそれに関心を持って、いろいろと本も読んだが、近頃の私が、ジョージ・アダムスキー言うところの大脳の触感に重大な関心を持っているゆえに、特に魅力を感じたのである。

勿論、我々人間も五百万年以上、三十億年以前位の古い世代の祖先達は、それらの無条件反射的のハタラキを遺伝されて生まれ、それによって自然界に生き永らえて、世代を重ねて、はびこることを得たものではあるが、直立して平地を歩き、言語を用いることによって、その大脳の発達が素晴らしくなるに従って、かえってそれらの祖先達から世代を重ねて受け継いだものを退化させてしまっているものである。そこで私は、多分我々がその大脳辺縁系と称えているところの古い脳に遺伝されてたくわえているはずの動物的のソレらの本能と見るべき智恵を呼び起こして強め、その上に、我々人間にして初めて持ち得たところの大脳皮質の新しい脳の神経網を研ぎすませて鋭敏にして、そこに外来からの不可視的な光線を感じ、我々の聴覚を超えた超音波をも感じとり、なお四次元、五次元の動静をも感覚する能力を呼び覚まし、磨き上げたいとの努力を始めたのである。アメリカのジョゼフ・マーフィー博士は、マーフィーの法則と称えて、潜在意識の働きによって成功することを考えたが、私は潜在意識とは、人間出生して一カ年から三カ年位の間に、まずその根底ができ始めて追々に成長する間に、いろいろの、その本人が深刻なイメージを受けたものが、神経の深層に潜在しているものと考えているから、それらによって妨げられるところの我々の意識を浄化するためにも、潜在意識として蓄積されたところのイヤなイメージを、楽しい愉快なイメージと取りかえる努力は根本的な事として大切ではあるが、ある人がその願望を成就して成功するための精神的の根拠を築き上げるのは、その人が、自示暗示によって人格的に根底をつくり上げるものであると考えている。

その見地からすると、ジョゼフ・マーフィー博士が指導するところの、寝ても覚めても、余暇さえあれば身体をリラックスして楽に構えて、自分が成功して行く姿を具体的に想像せよというのは、近頃私が静座をして自己暗示によって、自らの体質の改善と、己れの大脳の神経が磨ぎすまされたところを想像する態度と同じであると考えられるのである。

古来、神がかり的な霊感や神託も、そのモトをただせば、ここに帰因すると考えられるのである。脇目もふらず、一心不乱に自ら正しいと思う好もしい道に寝ても覚めても努力精進する姿は、他の人をも感動させるものであると同時に、この自然界においては真剣に生きるための力強い行動は、それを見るものとして引き入れ、巻き込むものであることが多いのである。

特に人間には強力な大脳神経の発達がある。それをより以上に震幅を強くして他のそれらの繊動を感知し、当方の強烈な振動で他を動かすことも可能であると考えて、私は今、努力研究している。

●己れをシッカリ掴むこと

1976年4月号のリーダーズ・ダイジェスト誌の九十頁に、マーガレット・スターン・マチソンという人が「重すぎ

た期待」という題で娘のケイティの事を書いているが、ケイティがその両親の期待に沿うべく、己れを良い娘に仕立て上げるべく努力しつづけて、ついに己れ自身やりきれなくなって精神科の病院に入るまでに到ったが、医師と両親の努力で己れを取り戻したことが書かれている。

私は近頃、俗間にはびこっているところの霊感や霊視や霊聴等を、神仏または霊の仕業ではなくて、人間がその大脳の神経に触感的の感覚を受けるものであると考えて、その能力を鋭敏にしながらも迷信とは離れて区別されるものにしたいと努力をしているが、前記の記事を読みながら、人間はまず己れをシッカリと把握して、しかも、在るがままの己れを失わないように生きることこそ大切であり如何なる際にも常に泰然自若として己れの在るがままの姿であることこそ、己れの大脳の神経をして全回転的のハタラキをなさしめ得ることにふさわしい境地であると考えるものである。しかし、人間は社会をなくして生活をするものであり、人が誕生する事はつまり人間の社会に生まれて来る事であらねばならない。母の乳房を離れたときから、常に己れを取り巻くところに社会があるということになるとすれば、それなりに社会的にも己れを馴らさなければならない。

そこで私は、相手が、そこに在る場合には、私自身の己れは厳としてそこに存在しながらも、相手の眼前に対座し、あるいは行動している姿ある私をして、その場にふさわしく、相手によっての然るべき対処の仕方をなさしめるのである。つまりそれは、私は私の己れ自身をして、必要がある場合には、たとえそれが私が独りで無為に端座をしている際であっても、客観的に己れである私は、私を観察しているのである。

私を取り巻いている社会は私の移動によってその時その時で移りかわる。私が移動するたびに、私の在る所の環境の場がかわり、場がかわるたびに私の立ち場も異なってくるものである。頑固ではなく、肩を凝らすことなく、感情は無理に抑えることなく、しかも充分の知性をハタラカセて、それぞれの場にふさわしい態度と適当な礼節を守ることこそ、社会的人間としての責務であると同時に、己れをして相手方のペースに巻き込まれることなくその場の雰囲気に上ることなくして、恒常的に己れを持するためには、己れを客観的に観察しつつ、相手により、その場によって、それぞれの場において、自由自在に、己れを酌量するモノ差しをつくって間に合わせるようにすることこそ、自己満足、自己主義、利己主義等の誹りをまぬがれるものであると考えている。

私は、私がこの地球上の自然界に棲む生物であることに徹している。しかし、私が人間である点では他の生物の如くにひたすらに、生きることでは、観念的に満足することはできない。そこで私は私が人間であることを第一義として、しかもこの地球上の自然界に棲息する動物であることを充分に心得た上で生活をしようと心がけているものである。

己れは己れに背くことなく生活しているという自信なくして、何の精神的の充足があろう。

●言葉のない時間を持とう

私は昭和五十一年度の研究の目標を、神仏や霊が存在しない大脳皮質の神経の触感に置いて努力している。ソレは俗に霊感といわれるものではあるが、それは人間がなすものであるが、そこに俗世間の迷信が入り込んで、我々が推測から想像した神や仏やさては何々の霊までを想定して、それらの力によるものであるとされたものである。とかく人間は己れを基盤として神を考え、仏を想い、霊を思う。アラユル神仏や霊の姿は、人間が己れの姿を基準として造り上げている。

私はこの大宇宙の広大な全体を考えているゆえに、この小さな地球上の自然界は、極く微小なものになってしまう。いわんや、その中の人間に到っては、それこそ唯我独尊的の思い上がりは許されないことと謙虚に考えている。大宇宙の測り識ることを得ない島宇宙の数、また、その中に存在するところの恒星、それに付随するところの惑星と考えを推し進めて行くと、我々が想定している神や仏や霊の姿はボヤケて、そこに測り識れない偉大な何かの力があるらしいことは否定することはできない。しかし、それを宇宙精神ときめつけることはアマリに我々人間を基とした考えであって、それは我々が想像する如き精神や、意識等の我々の大脳神経のハタラキに似たものであるよりも、より大規模のものであらねばならない。

そこで、私はこの広大悠久な大宇宙が物理的に不可逆的な現象を進めているところに、一つの大きな方向づけがなされている。そのゆえにスベテの大宇宙の中の存在物は、その方向づけの方向に従って大きな規模で進展をして行くのであるとの仮説を立てて、まず低俗な神仏や霊を排除した上で、徐々にその大宇宙の方向づけの道程の流れに乗りたいと考えている。

今回徳永・医博から河出書房新社刊、オルダス・ハックスレー著、今村光一訳「知覚の扉・天国と地獄」という本を私はもらった。それはこの私の研究に大いに参考になるものであるが、今朝NHKのテレビジョンで、今から四年前に死亡したオランダの版画家モーリス・エッシャーの版画を見て、その説明を聞くに及んで（ソノ展覧が近く百貨店である）人間の概念が、いかに自然を曲げたものにしているかを痛感したのである。

たとえば、コノ私を知って下さっている皆さんにしても、「亀田」という、私のイメージを概念としてお持ちになった上で私に面接される。そこで私はその方のイメージからつくられた概念による亀田というものと、生のその場にいる在るがままの私とがダブってお目にかかっていることになる。桜の花という概念によって、人さまざまな桜の花を見、富士山という人さまざまの概念の眼鏡を通して富士山を眺める。目の前にある机もペンも原稿紙も、スベテ概念を排除して、名づけを取り除けば、ただのそこに在る物

である。天も地も山も河も立木も石も鳥も獣も人間がつけた名称を取り除き、イメージから来るところの概念を取り除けば、ただそこに在るものである。

私はある許された時間中だけ、一切の言葉や言葉を符号とした名称づけを忘れて、ひたすら、私の今までのイメージによる概念を排除した上で、そこに在るものを見ようとして努力している。大いに難かしい。しかし言葉を用いないことは考えないことである。妄想が起こることもない。その時間中は私は私の肉体と大脳の辺縁系の神経系のハタラキによってのみ存在することになるらしいことを感じている。そこでその間の私はこの地球上の自然界の他の動物の如くに、真剣に、そこに生きて在ることを痛感するのである。

●直感・真覚1（通話中に透視をすること）

私は過去三十年位の間、電話による通話中に、要件の中の必要な点を幻視によって摑むことにしている。

大抵の場合に、電話で通話をしながら三メーターないし五メーター位離れた壁の面やガラスの面、あるいは板様の建材の面等で見ているが、白紙を手近に平面的にまたは立体的に貼りつけたものでもよろしいと考えている。要は直射日光や反射光線で照り返しがないこと、他のモノが影をうつしていないこと、色模様や邪魔になる色がついていないことで、馴れた場合には多少のそれらは邪魔にならなくなる。

電話器を通じて相手と相通じているのであるから、相手の話を聞きながら、相手方と一つになって、その話に打ち込んでみること、そして要点になると、あらかじめ定めた場所を眺めながら話を聞いていると、その要点が具体的に幻視となって見えてくるのである。

それは数字であることもある。私は穀物の相場を前日に視たこともあり、株式相場をあらかじめ視たこともある。

今でも判然と想い出すのは、紛失物の在る場所を透視した中の一つで、ある婦人からの緊急の場合の問い合わせに対して、まずその婦人の服装を確かめて、立って後ろ向きになって、両手を前に水平に伸ばした姿を見て、そこに何があるかと言った。タンスの引き出しと言うから、そこを見なさいと言ったら、アリマシタという。

それから、帰宅が遅いので心配している娘さんのこと。関西方面に二人で出かけたという。私の眼には京都の駅ビルの二階の売店が見える。それから新幹線への跨線橋が見える。いずれも私がしばしば行った所であるからスグにわかった。今、京都の駅ビルの二階にいるから、ヤガテ新幹線で戻る。ソレにタクシーの時間を計算して待てと言った。これらは現在とそれに続く様相を透視したものであって、値段を数字的にあらかじめ視るのは未来のものである。最近になって、直感であり、真理に則した感覚を得ようと努力している私は、己れが熟練したものを皆さんに伝授して、お役に立てたいと考えて、具体的の方法として、この電話器による通話中の透視の訓練をおすすめするものである（シカシ私は仕事としては用いていない）。

ごく最近の事では、遠藤周作夫人の母堂から、「例によって、また紛失物をしました。今回は我家の入口のカギです」と電話で言ってきた。壁を見ると、同夫人が前かがみになって両手を斜め下前に伸ばした姿が見える。「ソウイウ体勢で見つかる所です」と言って置いた。二日位後に、ソファの背の所にありましたと電話があった（私はしばしば電話による直覚的の幻視をしているが、日常の客の相談には正確を期するために用いていない）。

同人徳永夫人麗子さんは創元社の同人である洋画家で、無慾で純粋な画を描かれるが、昨日その画を上野の都立美術館で見たが、先日夫君徳永氏の電話を受けたときに私が透視したのは、その画、裸婦の上半身と下半身とであった。顔が小さい肥えた胸元から腰までの形と、別に右足の膝を立てた所だけが見えたが、両手と左足の偉大な太い上脚部と腰とは見えなかった。しかし、その顔から胸、腰までの形は、私があらかじめ透視したものと同じであって、面識がある人の画に出会った感じであった。ここで私が強調したいことは、直感や真理に則した感覚は善意であり、宇宙の真理（情報）に則した場合に得る事であって、自我の満足や、低俗な慾望によるものは成就しない事である。

己れが真理に則して生き、大宇宙の情報のままにこの地球上の自然界の人間という生命に徹して生きるところに、初めてなし得るものである。

●直感・真覚2（レーダーによる触感）

人類は大脳の前額部前頭葉の発達によって観察と判断とのハタラキを強めたことは、この地球上の自然界の生物の、群を抜いて万物の霊長に成り上がった所以であるが、私は大脳皮質の前額部前頭葉こそ、思念力を集中してテレパシー的にそれを発射する機関であると考えている。

また俗に第三の眼といわれているのも前額部前頭葉の中央に位する所である。かねてから私は、そこから不可視的の念波を発射して、相手方の身体に当てて、その感触によってその人物を認識することにしているが、ときにはその意向を感じる場合もある。そこで今回はそれを皆さんに知らせて、熟練の上、実際の用に立ててもらいたいと考えている。

前回に述べた電話中に先方の話を聞きながら、相手と一つになって話の要点を幻視することも、今回のこのレーダーによる触感も、まずそれを行う際には自我にこだわらないことと、正当な慾望以上に慾心を持たないことと、己れの正当性に対する確信が必要条件となるものであって、その根底には「慈悲」心が必要である。私が信じる慈悲心とは、つまり、「この自然界に存在するスベテのモノをして、そのモノらしく存在せしめるべく善意をもって臨む」ことである。

まず己れが正当な生き方をしていると

確信を持つこと、身体の無駄な力を抜いてリラックスをして、前額部前頭葉に気を入れて、眼は半眼にして静かにかまえて、相手の肉体の細胞に向けて、第三の眼の所から不可視の念波を送るのである。テレパシーを送るのではないから力を入れる必要はない。極くおだやかでよろしい。

(1)相手が肥えて太り肉で、反応がないのは無力である。痩せて反応がないのも意志薄弱である。

(2)太ってドッシリと落ちついた手応えがあるのは、正しくして内容がある。痩せて落ちついた手応えの人は達成している人である。

(3)痩せても肥えても肉が締まって、小さな波長で反応してくるものは、意識的、知能的であって、手腕もあるが、自己中心的である。智者だが案外自信の根が浅い。

(4)レーダーの光線が透過してしまう如くに感じて反応を感じ得ない人は、生物としての本能的の知恵を発掘して、それを用いることができる人物である。

(5)善意の人は抵抗反撥がないが、悪意の人は、反撥を強く感じる。

(6)歓喜は解放的で悲嘆は淀んで透過する。善意であり正直者であっても自己本位の人は芯があって、身体の中心が堅に柱の如くに残る。

(7)剛情者は表層は透るが内から抵抗を感じる。

(8)狡智あるものは、表層に薄い抵抗する皮を持っている上に、内部でも透過に対する抵抗を感じる。

(9)概して善意は暖かく、悪意は冷たい感覚を伴う。

(10)ヒステリー気味の人は抵抗にムラがあるが、表層ひと皮のみの抵抗である。

(11)ノイローゼは瞬間的に反応するが、こちらの注意をそらすと無抵抗に淀んで透過する。

(12)分裂症のたぐいの人は、表層の筋肉で固く反応する。

(13)疾病のある人は、その患部が抵抗を感じ、なお、その病いによっての微かな臭いが感じられる。この臭いは糖尿病、胃病、肝臓病、女性の生理時、婦人病の或るもの、あるいは男女性共、老齢になると体臭を感じる等、習慣的に憶えるべきであるが、前記の反応や抵抗にしても、いずれもそれを行う人によっての個人差があるから、みずから努力してその技を開発すべきである。

●修行の記録

私は自らの人間を完成しようとして努力しているが、不思議なことに、その都度、私に必要な書物を期せずして頂戴するのである。また、あるときは、外出の帰りに書店に入りたくなって、いろいろと本を眺めて、一冊を購って来る。それらが、実は私にそのときに必要な資料になるのである。

かくして昨年からの私は、フランスの生物学者J・モノーの「偶然と必然」を読んで、私の考える基礎をつくり、イタリア人でアメリカに帰化した、これもJ・モノーと同じく、ノーベル賞受賞者のS・E・ルリアの「分子から人間へ」を読んで仕上げをして、N・コールダーの「危機に立つ心」を読んで、人間の心というものを科学的に考えることを憶えて、さて、それからH・リンデマン著わすところの、ヨハンネス・ハインリッヒ・シュルツ博士の考察による西ドイツで流行しているA・T訓練法、アメリカのL・チェーズ、C・キングの「ナ・ダーム」の超越瞑想、医博横山慧吾氏著わす「静坐療法」、イギリスのマーフィー博士のとなえる「マーフィーの法則」等、いろいろと取り組んでみたが、私にはピッタリとこない。いずれも、ある程度の効果は見えるが、日本人向きではない。そこに「幽冥界研究資料第一巻」という、昭和14年9月、牛込山雅房発行の古い本を、横浜の小出氏からもらった。読んで見ると、ヒマラヤ聖人の日本版である。日本人、または大僧正天狗の事が詳細に書いてある。

いにしえの中国には仙人が在った。それは主に道教を奉じるものであり、日本では山人または天狗が存在した。山人は日本の神道に奉仕し、天狗の中で正しいものを僧正とあがめるが、これは仏教を奉じるものである。

役の行者の如くに神仏両部を奉じる行者にして業力にすぐれた方々も在った。しかし、役の行者はこの界において行力を現し、名を挙げるべく心がけることは、山人・天狗の大いに嫌うところであって、真の山人・天狗は、彼の界または彼境といって、人間社会を離れた仙境に住むものである。私がこの五十数年にわたって、徐々に御縁が深くなって、導き授けられている道了大薩陀は、元、山岳修行の行者であって、神仏両部を奉じて、初め、琵琶湖のほとりの三井寺に逗留し、後に小田原在の大雄山最乗寺に住し、やがて、奥の院の裏山に入って、後、世に現れることなく、お姿を拝した人もなかったのである。

私は縁あって、しばしば、お姿を拝し、また写真にも尊顔と、それから天狗らしきお鼻の高いお顔とが現れたが、また、私がお力を拝借したいときには、祈念をすると、必ず他の人には見えないが私には黒い衣服を着た大きな体格のお姿が、あるときは京都秦の撮影所で、またはテレビ局のスタジオで、小田原の市民会館の舞台裏等々で拝されたのであって、私の事務所でもしばしば私が念ずると、至極普通の黒い布子を着た大きな体格の、五十才または六十才位と拝されるが無雑作で偉大なお姿を拝することができるのである。

私は斯くして道了尊を大導師として、しかも私らしい研究のしかたと、私らしい生活とをおゆるしを得たものとして、一心不乱に、この界、この境に生活しながらも、心を、山人天狗に向けて精進しながらこの界に於ける目覚ましい成果を上げるべく研鑽しているのである。そして、その人生訓は、

①この地球上の自然界に棲むところの、真の人間であることに徹し、②己れが懸命に強力に生きるのは勿論、他の人がその如く在ることの妨げをしない。③根本に慈悲の心をおく。

（4頁へ）

●アリス・ポマロイ夫人
（米マサチューセッツ州ノースボロの自宅にて）

第3章

さらばニューイングランド

〈連載〉米国ＧＡＰ本部訪問記（完）――久保田八郎

ふたたびロサンジェルスへ

明くれば十一月三日、今日はロサンジェルスへ行く日である。早朝七時に起きた私たちは大急ぎで旅装をととのえて、ロイヤル・インのカウンターに別れを告げ、タクシーでバス停へ向かった。昨日の快晴とは打って変わって空は鉛色の厚い雲で覆われ、街路はモヤでかすんでいる。

グレイハウンド・バスの停留所で切符を買い、ロサンジェルス行きのバスはいつ来るのかと尋ねると、そこにいると係員が外を指さす。見ると建物の横の退避所に茶色のバスがとまっている。外へ出て乗り込もうとすると塙君が本当にこのバスなのかと不安がるので、ステップから入りざま運転台のすぐうしろに座っていた若い娘さんに「このバスはロサンジェルス行きですか」と尋ねると、そうだと答える。棚にトランクとカメラバッグを放り上げて、その女性のななめ後方の席についた。グレイハウンドというのは全米に路線網を持つ有名なバスで、トイレ付きの豪華な大型バスだと聞いていたが、実際はうすぎたなくて、車内も思ったほど広くはない。むしろ日本の観光バスの方がはるかにきれいで乗心地がよいようだ。ただしこちらのバスは網棚が大きいので、かなり大きな旅行用トランクが楽にのっかるから有難い。なにぶん広い国なので長距離走行用に作られており、車体のどてっ腹に貨物を収容する貨物室がある。

ふと気がつくと、くだんの娘さんが棚の方を見てはチラチラと私の顔を振り返って見る。その眼は好奇心に輝いている。ハテナと思ってトランクを見上げると、私の住所氏名をローマ字で記した大きな名札がぶら下がっており、それが眼について「なんだ日本人か」と思ったらしい。

バスが走り出してから私はぼんやりと窓外の風景をながめていた。さらばオーシャンサイドよ、また来る日まで、と言いたいところだが、どうも感傷的な気分がさっぱり起こらない。そのうちに例の娘さんが黒人の運転手に何事かしきりに話をしかける。すると運転手はときどき横を向いたり後を見たりして応答する。百キロ近いと思われるスピードでぶっ飛ばしながら後ろを振り向いたりするのだから、あぶなくて見ていられない。運転台の上方の壁には「走行中、運転手に話しかけてはならない」と標示してあるにもかかわらず日本では考えられないような光景が展開する。気になって仕方がないが、妙におかしくもある。

バスは数十分ごとに主な町の停留所へとまり、数分間停車する。すると中年のおばさんたちがステップの下へ来て、このバスはどこそこへ行くのかと聞くが、運転手が違うと答えると、なさけないような顔をして去って行く。こんな情景は日本と全く同じだ。

ある町を通過するときに、十五、六歳の黒人の少年が真っ黒のスーツに純白のマフラーを胸に垂らし、黒い帽子を斜めにかぶって街角に立っていたのが印象的だった。家並が断続的に現れては後方へ流れてゆく。商店街の家屋のスタイルはたしかに日本の都会地のそれとは異なるが、氾濫する横文字の看板類を全部日本文字に変えたとすれば、都内の青山、六本木あたりと大差はないだろうナと思いながらながめているうちに、バスはやがてロサンジェルス市内に入って行った。

ここのグレイハウンド・バス・ターミナルは巨大な建物で、二階の一方の側に空港みたいなゲートが沢山並んでおり、そこから乗り降りするのである。

翌日乗るはずのAA（アメリカン・エアラインズ）の旅客機の再確認をするためにターミナルの入口まで行って電話をかけようとしたが、番号帳を調べても番号がみっからない。やむなく入口の旅行社とおぼしき事務所へ入って、空港のAAの電話番号を教えてくれと頼むと、五十がらみの長身の社員が、これ以上不愛想な顔はできないというような不機嫌な顔つきで、ぶっきらぼうに教えてくれた。すぐにターミナル内から電話をかけると女子事務員が出て、今度は明朗な丁寧な英語で応答し、こちらの指定した旅客機よりもニューヨーク行き直航便で空席があるからそれに変更したらどうかとすすめてくれたが、到着時ケネディー空港へ友人が迎えに来ることになっているので、と答えて一応ことわった。しかしこれで気分がスカッとして俄然快活になってきた。げに人間の親切さが他人に与える影響の大なることを今更のように感じたのであった。

ターミナルの外でタクシーを拾って、予約済のホリデイ・インへ行く。インであるからやはりホテルとしては小規模である。カウンターでチェックインの手続きをするとき、係の若い黒人女性が one bill にするか two bill にするかと尋ねるので、その意味がわからず、Pardon？と聞き返すと、その娘さんがクスクス笑って二人分の明細書を一枚にするか、それとも別々に作成するかの意味だと説明するので、別々だと答えた。語学上で恥をかいたのはこのときだけだが、知ってしまえば何でもないことなのに、やはりあらゆる言葉を知っておく必要があることを痛感した。

ふと横を見ると両替所があって、見事な純白の制服制帽を着用した黒人の老人がカウンターを前にして座っており、ぶつぶつ言いながらお金をかぞえていて、それを五歳ぐらいの可愛い白人の少年が背伸びしながら見上げて、渡してくれるのを待っている。その光景はまさに一幅の絵画だ！　よし、これを撮影しようと、カメラバッグに手をかけたとたん、少年は走り去った。カメラ狂の私は金賞をとりそこねたような残念な気持でエレベーター内に入って行った。大体、訪米中に何度か決定的瞬間やすばらしい被写体を眼前にするチャンスがあったが、そんなときに限ってカメラがバッグに入っていたり手元になかったりする。

ホテルに荷物を置いて、私たちは外へ出た。これから私の出張目的である書物の大量購入に出かけるのである。入口の外にタクシーがいたのでそれに乗り込んだ。でっぷり肥えた黒人の老運転手が

Where to?（どちらへ？）とtoを長く尻上がりに発音して尋ねるので、この町で最も大きな書店へやって下さいと頼むとオーケーと答えて繁華街の方へ飛ばして行く。日光が明るく輝いて気分爽快である。やがてある書店の近くに停車してから運転手は車を降りてわざわざ店まで案内してくれた。ずいぶん親切だがこれはチップをはずんだせいかもしれない。

書店に入ってUFOと超能力関係の図書を探すこと約一時間、主としてペーパーバックの本を四十冊近く集めて、これを日本へ送ってくれと言うと、上品な顔付きの中年女性の店員さんがびっくりしたような顔をしたが、気前よく代金と送料を支払うと非常に感謝して丁寧にお礼の言葉を述べた。「日本人は大金を持ち歩く」という伝説を本当だと信じたことだろう。おそらくその日帰宅して家族の前で「今日、日本人が店へ本を買いに来て（両腕を大きく広げながら）こんなに買ったわ。日本人てお金持ちなのね。驚いちゃったわ」とかなんとか話すのだろう。

●ロサンジェルスにて。白シャツ姿が筆者。

ますます気分がよくなって二人は外へ出た。アダムスキーがむかしコンタクトした場所だというクラーク・ホテルを探そうかと話し合ったが、この町にはたった一日しかいないし、むかしの事なのでもうそのホテルはないだろうというアリスらの言葉を思い出して、探すのは中止し、ぶらぶらとデパートへ入った。どうみても内部は東京のデパートより劣る。これは後日ニューヨークでも感じたことだが、東京都内の一流デパートの方がはるかに品数が豊富で、陳列の仕方が巧みであり、はなやかである。そのかわりロスやニューヨークには高級専門店が多い。

デパート内をウロチョロしていると、むこうから白人の少女がやって来て、私を見るなり Mayby Japanese! と言った。ああ、私はやはり日本人に見えるのか！ さもありなん、「眼鏡をかけてカメラをぶらさげていれば日本人と思え」といわれているらしいが、私はまさにピタリなのだ。

デパート内では別段買いたい物もないので、二人はまた街路へ出た。どうもアメリカのような感じがしないナ、東京の丸の内みたいだ、とかなんとか話し合いながらあてもなく路上を逍遙する。リトゥル・トーキョーと呼ばれる日本人街があることは知っていたが、私たちには全く関心がない。そして行かない方がよかったことは翌日わかったのである。

しかし折角来たのだからアダムスキーを記念して何か買おうということになり私はネクタイ一本とタイピン、カフリンクスを専門店で買い求めた。銀メッキの安物だが、これはその後も愛用している。

疲れが出たので二人はホテルへ引き返して早目に就寝した。

翌朝、荷物を持ってホテルの外へ出ると、前日書店へ案内してくれた黒人の運転手がいて、私を見るなり「やあ、昨日と同じ旦那じゃないですか」と手を振って大喜びしながら迎えてくれた。みるからに好々爺という感じのする人である。このタクシーで約四十分間飛ばしてロサンジェルス空港へ着いた。

奇跡が発生！

AAのチェックイン・カウンターの前のベンチに腰をおろして、時間が来るのを待ちながら一服やっていると、東洋人らしい青年がやって来て、そばのベンチに座った。ジャンパーにジーパン姿で、一見学生風でもある。荷物を全く持たず尻の両ポケットに手帖やその他の物を無雑作に突っ込んだままだ。しばらく私たちの方をじろじろと見ていたが、ふと私に向かって Can you speak Japanese? と訛のある英語で話しかけてきた。明らかに日本人の英語である。「ええ、私は日本人ですよ」と日本語で答えると、青年は眼を輝かせて日本語で話し始めた。聞いてみると、これからニューヨークへ行きたいが、英語がうまくしゃべれないので飛行機の切符が買えない、何とかしてくれないかと言う。それならというわけで、青年を切符売場へ連れて行って通訳し、交渉すると、幸いに空席があったので、結局、私たちの飛行機で一緒に行くことになった。

レントゲン検査の関門を通過するときに塙君の小型トランクがひっかかった。彼は内部にカメラ、テープレコーダー、三脚、その他の金属製器材を詰め込んでいるので、拳銃か機関銃を入れていると感違いされるらしい。羽田空港でも長時間検査されていた。

機内に乗り込んで青年から話を聞くとこの人は東京世田谷のNさんという人でロックの音楽家だが、米国で修業するために今年（一九七五年）八月にロスへやって来て、ガードナーをやりながら勉強中とのことで、二週間ばかりニューヨークの知人の所へ行くのだという。私が名刺を渡すとNさんは大いに驚き、「UFOと宇宙」なら知っている、編集部にFという人がいるだろう、あれは友人だと言う。この奇遇に私も驚いた。後日帰国して羽田へ迎えに来たF君にこのことを話すと、彼は飛び上がって叫んだ。「N君だ！ 今、消息不明で東京の家族が心配しているところです。これは奇跡を通り越していますよ！」。つまり私がNさん

健在の最新情報を持ち帰ったというわけである。世の中は広いようで狭いものだ。

機内で雑談しているうちに例のロサンジェルスの日本人街リトゥル・トーキョーの話が出た。Nさんによれば実に不潔な貧弱な町で、あのような町を作るとは日本人のツラよごしだという。相当ひどいものらしい。そうか、やはり行かなくてよかったナと思ったが、それにしても日本で出ている米国旅行案内書類に立派な観光名所の如く書いてあるのはどうしたものだろう。それよりもリトゥル・トーキョーを見た白人から本物の東京もこんなものだと思い込まれてはたまらない。

宮内氏と再会

機は途中ロチェスターへ寄って、やがてニューヨークの上空へさしかかった。すでに日が暮れて、下界の光景がすごく美しい。ダニエル・フライが円盤に乗ってニューヨークの夜景に感歎したというが、全くそのとおりだ。オレンジ色の微小な宝石を無数にちりばめたように全体がキラキラと輝き、整然としたゴバン目の街路が灯火ではっきりとわかる。

ケネディー空港には宮内温夫氏が出迎えに来ておられ、久方ぶりの再会を喜び合った。本誌に何度か紹介したが、宮内氏はGAPの有力メンバーであり、アダムスキー哲学を実践して、ニューヨークの名門ブッシュピン・スタジオで唯一の日本人アーチストとして活躍するという栄冠をかちとられた方である。

●ニューヨーク5番街(エンパイアの展望台より撮影)

早速タクシーで市内へ向かう。さすがに世界屈指の巨大都市だけであって、ロサンジェルスとはケタ違いな威圧感を覚える。宮内氏によれば、ヨーロッパの各都市は氏が見た限りではもはや"倦怠期"に入って眠っているが、ニューヨークはまだ目覚めて活動中であり、これほどに活気に満ちた都市は他にないという。

車はやがて七番街のホテル・アメリカーナへ着いた。ここが私たちの根城である。ロビーはさして広くはないが、白人や黒人、東洋人などでごった返して、国際色豊かだ。いったん宮内氏と別れて、私たちはチェックインの行列に入った。

カギをもらって荷物を持ったボーイのあとについて自室へ入る。チップとして五十セント渡したが、嬉しそうな顔をしない。一ドルが相場かと思ったが、どうも高いような気がする。これならば一日に百人分運んで百ドル、一カ月に二十日働いて二千ドル、こんなべらぼうな儲けはない。一日に五十人分運んでも一カ月千ドルだ。やはり五十セントでいいのだろうと思いながら入浴をすませて、塙君と二人で地下の食堂へ入った。

翌五日はまたも図書購入のために二人で市内の書店をかたっぱしから歩きまわった。UFO関係図書はほとんどペーパーバックの小型本で、超能力やオカルトと同じコーナーに並べてある。ロスで買った本と重複しないように、ロスの書店でもらったリストを見ながら慎重に買いあさった。多量に購入するので、どこの店でも店員が驚いたような顔をする。ある店のレジにはインド人らしい民族衣装を着た若い娘さんがいて、ひどい訛(なまり)の英語で応待したが、日本へは郵送できないというので、仕方なく宮内氏に預けて送ってもらうことにした。この一日で合計約六十冊の図書を購入して一応任務を果たすことができた。

ロサンジェルスでもそうだったが、ニューヨークの書店でもアダムスキー関係の本は全く見当たらない。出版はされているとのことだが、部数が少なくてゆき渡らないのか、それとも何かの圧力があるのか、真相は不明だが、とにかく現状では一般人がア氏の問題を知らなくなる

●ニューヨーク，セントラル・パークにて。

●宮内氏のアパートにて，左より宮内氏，筆者，啓子さん，塙。

のも当然だ。

夜は宮内氏のアパートを訪問する。国連ビルに近いイースト側の二十階の大アパートの十八階に居室がある。同居中のお姉さんの啓子さんのお心づくしの日本食に舌鼓を打ちながら四人で愉快に談笑する。

七、八年前まではまさかニューヨークで宮内氏ご姉弟と会うようになろうとは夢想もしなかったことである。なにか宿命的なものを感じるが、宮内氏の成功は、ずば抜けた実力プラス不抜の信念プラス努力の結果であり、どん底におちいっても絶対に悲観的想念を起こさずに成功のイメージを描き続けたという宇宙哲学の実践のたまものであろう。そして私の場合もニューヨークで必ず宮内氏に会うというイメージを描いていたのが実現したのだと思う。してみると人間の運命は意志の力でどのようにもなるのであって、すべてがあらかじめ決定された絶対的なものではない。

大体、アダムスキー哲学でいうカルマというのは「厚因と結果の法則」という意味であって、〝絶対的な宿命〟論ではない。たとえば下駄の鼻緒が切れても、これは宿命だったのだと観じて、人間の意志力の介入は無関係とみる宿命論者がいるけれども、それは誤りであると思う。鼻緒が切れそうになった時点で「このままならば切れるだろう。早くすげ替える方がよいだろう」と直感的に洞察して（換言すればテレパシックな感知力で予知して）、てっとり早くすげ替えればよいのである。このような因果関係を私たちはカルマと呼んでいるのであって、無気力な〝諦め〟を意味するのではない。

談論風発、尽きるところを知らず、私たちはアダムスキー哲学やアメリカ文化論、人生論、果ては恋愛論まで語りながら、大いに飲み、食べて、刻はいつしか深更に及んだのであった。この夜ほどに楽しかったことはない。私が実弟の如く愛した宮内氏のニューヨークの住まいで邂逅の歓喜が爆発する——。

マサチューセッツ州でアリス・ポマロイ夫人に会う

翌日午後一時に私たちはニューヨークのラグァーディア空港へ行った。今日はここで宮内氏と合流して三人一緒にデルタ航空機でマサチューセッツ州ノースボロに住むアリス・ポマロイ夫人を訪問しようというわけである。アリスはアダムスキーの高弟で、一九六五年四月に東部でア氏が死ぬまで付き添っていた重要な人物なので、未公開の貴重な情報が入手できるかもしれない。非常な期待に胸をはずませながらロビーで待っていると、やがて宮内氏がやって来た。一体にこの人は服装にこだわらない人で、この日もジャンパーにジーパン、手にした荷物は米軍のGI（兵隊）が持つような粗末なバッグである。米国の社会の裏面まで知り抜いているからこそ、このような旅装で平気なのだろう。背広にネクタイという正装をしている私たちこそ田舎者なのかもしれない。

小さな旅客機に乗り込んで出発する。国内線のせいか、ストゥーアデスはジャ

ケツを着た普段着の女の子で、日航やAAのそれに比べればかなり気楽な感じがする。

約五十分してマサチューセッツ州ウースター空港に着いた。この近くにノースボロがあるのだ。飛行機のタラップを降りて空港ビルまで歩いて行き、入口から入ったとたん、「コンニチワ」という妙な発音の日本語が耳に響いた。おや、と思って声の主の方を見ると、眼鏡をかけた上品な婦人が微笑を浮かべて私の方を見ている。アリス・ポマロイかと尋ねると、そうだと言う。実に意外な感じがした。かねてから文通や録音テープの声などで相当な年輩だと思っていたし、第一、カリフォルニアではスティーヴが七十歳くらいだと言っていたので、かなりな老婆だろうと想像していたのに、眼前にいるアリスは予想外に若々しい。年齢は五十歳代だろう。私が連絡しておいた時間どおりに空港へ迎えに来てくれたのである。心から感謝したが、それにしてもいきなり日本語で挨拶するとはユーモラスな婦人だナ、と思いながらビルから外へ出て、彼女の車に乗り込んだ。ここはいわゆるニューイングランド地方だから、かなり寒いだろうと予測していたが、思ったほどでもない。

そういえばニューヨークも十一月上旬というのにバカ陽気のため、異常に暖かく、外出時には上衣を脱がねばならないほどだった。もっとも私は人一倍暑がりやなので、街路を歩行中はすべて上衣を脱いで手に持っていた。おまけに白シャツとくるので目立ってしようがない。つまりニューヨークの紳士諸君はすべてハデなカラーシャツを着ていて、純白のシャツは私か、たまに見かける日本人観光客ぐらいのものであるということに後になって気づいたのである。だがカラーシャツを持たない私は（後日ニューヨークのデパートでカラーシャツを買ったのだが）この日も白シャツ姿であった。ちなみに、ネクタイピンをつけている男はほとんどいない。ネクタイを風になびかせているだけだ。

アリスが運転する車はハイウェーを約二十三キロ彼方のノースボロ目指してぶっ飛ばす。途中で雑談を交わしながら車はやがて田舎町へ入り、そこの目抜き通りを通り抜けて、次第に辺鄙な森林地帯へ入って行く。眼につく建物はカリフォルニアと違ってクラシックな英国風である。鉄筋コンクリートの大きなビルというものはまずない。ほとんど木造の家屋らしいが、白ペンキを塗りたくっているので、一見モルタル建築のように見える。

やがて車は林の中の一軒家の前でとまった。これがアリス・ポロマイの家である。日本の家屋のように玄関の土間などはなく、ドアーをあけて中へ入り、狭い廊下を少し行くと右手に居間の入口があって、そこのドアーが開いているので内部を見ると、一人の老人がオルガンを弾いている。入口で立ち止まったままその光景を見ていると、老人がこちらの姿に気づいて演奏の手をやめ、にっこりと笑って立ち上がり、入口の方へ歩み寄って来た。夫のオールデン・ポマロイだとアリスが紹介する。挨拶を交わして私たちは居間にくつろいだ。陽はまだ明るくて、十四、五畳ある居間は快適で心地よい。外見はそうでもないが、この家の内部はかなり広くて、間取りも十分であり、木造とはいえ日本ならば中流階級に属するような家屋だが、アリスの話を聞くと、なんとこの家は旦那のポマロイ氏が自分で建てたのだという！　しかも約五十メートル離れた隣家にはアリスの妹さんのメリーとその主人のクック氏が住んでいるが、この家もクック氏がみずから建築したのである。これは日本人との相違を痛感した一事であった。日本人は器用な民族だから、素人といえども家の一軒を建てるぐらいの能力はあるのだろうが、まず絶対にといってよいほど、そんなことはしない。素人細工だといって笑われるのを恐れてすべて専門家にまかせるのである。この頃は日本でも日曜大工というのが流行し始めて、各種の大工道具がデパートで売られているようだが、こうした風潮もすべて白人社会から入ってきたものだ。それでもまだ消化しきれないのが日本の社会である。

ところが、ポロマイ氏が愛用するオルガンが日本のヤマハ製だといって夫妻で得意然と説明するのを私は複雑な気持で聞いていた。すごく優秀な楽器だといって自慢するが、それはある意味で我々日本人を喜ばせようという善意に基づくものなのだろう。その気持はわかる。しかし日本人は四帖半と六帖二間ぐらいのマッチ箱のような貧弱な家に住んで（私もその部類に入るが）、一方では白人社会を席巻するような優秀な製品を製造しているのだ。日本人は一体如何なる民族なのか、わからなくなってしまった。カメラにしても、アリスによれば日本製品はドイツ製を凌駕し、米国人は圧倒的に日本製カメラを支持しているという。それだけの技術があるのならなぜ日本人は生活文化の向上を図ろうとしないのか。江戸時代そのままの不潔なタタミ敷きの部屋のザコ寝に甘んじ、障子という薄っぺらな紙一枚で室内外を区切り、コタツという足の先しか保温しない原始的な暖房器具で厳冬をすごすのは、一体、如何なる知能や社会観に基づくものなのか。どだい日本人は土地が狭くても科学的合理的な生活様式を確立しようという意識をいまだに持たないように思われるのだ。

マサチューセッツ州のこれほどの田舎で、東京の世田谷の成城あたりに持って来ても堂々と通用する文化住宅を主一人で建てたという話を聞きながら、日本人の技術や生活意識などについて、とめどなく想念が去来する。ジュータンを敷きつめた室内は広く、ソファやその他の家具調度類は立派であり、日本の水準からすれば中流以上である。しかしアリスは、薄給で教会に勤める夫を助けて家計を維持するために、パートタイムで子守の仕事をやっているのだという！　単に生活水準や収入の相違だと簡単に片づけるわけにゆかない文化の相違をイヤというほどに感じながら、私はソファに身を沈めてアリスと話し合っているうちに、話題はアダムスキー問題に移っていった。そこで当然のことながら次々と質問を出す。

●アダムスキー問題を語るアリス・ポマロイ。左は筆者。

三人のスペース・ブラザーズ

久「アダムスキーに関して知っている事を話して下さいませんか」

ア「そうね。一九六四年に私が初めてアダムスキーに会った当時のことを話しましょう」

ちなみにカリフォルニアのアリスやフレッド、その他の人々は、アダムスキーのことを大体に Mr. Adamski と言っていたが、アリス・ポロマイはGA（ジーエイ）と発音する。ジョージ・アダムスキーの略称である。私は「アダムスキー」または「ジョージ」あるいは「GA」と言ったりする。話相手に対してはアリス・ウェルズやマーサ・ウルリッチを「アリス」「マーサ」と個人名でそのまま呼びかけたが、彼女らはどういうわけか私に対しては Mr. Kubota と敬称をつけて呼ぶ。パロマー山からの帰途、フレッドが私に向かってしきりに Mr. Kubota と呼びかけるので、Mr. Kubota と呼びなさい、私たちはみんな友人なのだからと言ったら、以後はフレッドもスティーヴも私を Kubota と呼ぶようになった。

アリス・ポマロイは五十七歳ということで、私よりはかなり年長者だが、私は白人流に親愛の情をこめて「アリス」と呼ぶ。アリスもしょっぱなから私を「クボタ」と呼んでいた。日本人の女性から姓を呼び捨てにされれば言語道断な話だが、相手は親しい白人だから少しも不自然ではない。

アリスは語り続ける。

「一人の友達と私が三百五十マイル離れた別な友達の家へ行ったんです。そこへGAが講演に来ることになっていたからです。最初、私は彼の書物「宇宙船の内部」（「宇宙からの訪問者」第二部）を読んでいて、その内容がすごく重要で意味深長なものだと感じていました。それでその人に会おうと思ったんです。友達がひどく感動して、GAに手紙を出して、その町へ講演に来てくれと頼んだのです。それで二人で行って、そこへ三日間滞在しました。一九六四年三月のことです。アダムスキーは七十三歳でした。最初はホールで公式の講演会を開きましたが、このことは以前にお知らせしたわね。七百五十名の人が集まったというあの会合です。

そのときに起こった興味深い事をお話ししましょう。私たちはその講演会の世話をした婦人を援助しました。そこへ来た多数の人は未知の人でした。その講演内容を知ろうとして電話がかかってくるのを私たちは受けていました。それから私は言ったんです。『宇宙人が来るかもしれないから注意しているわ。だって、アダムスキーが講演をするときは必ずスペース・ブラザーズが来て援助してくれるんだと言っていたもの』。宇宙人は聴衆の中に座って、アダムスキーの講演内容についてテレパシーで送信しながら援助していたんです。それで私たちは人々が会場内へ入っていくあいだに廊下に立っていて、スペース・ピープルが眼につかないものかと気をつけていました。最後になってほとんどの人が会場へ入ったとき、アダムスキーが数名の人々に付き添われてやって来ました。この人たちが空港で出迎えてディナーに案内し、それから会場へ連れて来たんです。

アダムスキーのすぐうしろに三人の紳士が来ていたのを見て、私の内部で小さな声が語りかけました。『この三人はスペース・ブラザーズなのだ』と。でも確信はありません。そのときは内部の小さな声を信じてはいなかったんです。しかしどうしてもあの三人はブラザーズなのだという印象がわき起こるんです。でもその三人には話しかけなかったわ。私たちは電話の番をしながらそこにいたんですが、三人の紳士は階段を登って会場内へ消えて行きました。

そのうちに準備がすっかりできて、私たちも中へ入り、最前列に座ってアダムスキーの顔を見つめながら講演を聞きました。

講演が終わってアダムスキーが演壇から降りて会場の入口から出るまでに四十五分かかりましたが、これは彼が場内の通路を歩いて出て行くたびに、だれかが彼をつかまえて質問するので、それに回答を与えるから遅くなるんです。

それで私たちは会場のうしろで立っていました。そこにアダムスキーが壁を背にして立っていて、人々が半円形をつくり、私は彼の右側にいました。人々は彼に次々と質問します。彼は非常に忍耐強い態度を示しました。会場の持ち主は一同が出て行くのを待っていましたし、講演会の主催責任者である婦人は早く終わればよいがとイライラしていました。もう時間も遅いのです。

そのとき例の三人の紳士がまた眼につきました。三人は半円形の端に立っていましたが質問はせずに、ただ立って聞いているだけです」

アリスの話に熱がこもって、このあた

りでは動詞が現在形になってくる。過去の事柄でも現場を彷彿させるときは現在形になるのである。

久「三人の紳士が？」

ア「そう、三人の例の紳士です。三人とも私のすぐ近くにいました。そのなかの一人は今あなたがいる場所と同じくらいの距離の所に立っていました」

私とアリスの距離はものの一メートルも離れてはいない。

ア「するとまたも強い印象がわき起こってきたんです。『この三人はスペース・ブラザーズだ』と。この印象は非常に強く起こったわ。それで私は礼儀正しくしようと思って、どういう印象が来るか、何かのメッセージが送られて来るかどうかをみるために、横眼で見ていたんですが……ふと、まともに相手の眼を見ようと考えたんです。というのは、だれでも相手がまじめな人かどうかを知ろうとすれば相手の眼を見るでしょう。それで私もその人の眼を見れば相手がブラザーズの一人かどうかがわかるだろうと思ったのよ。

しかし相手は私の方を見ようとはしなかったわ。うつむいて自分の靴の方を見ながら、困ったというふうに靴で床をこすっているんです。それでこの人はブラザーズだということがわかったんです。これはたいそう興味深い事で、三人がその場所を離れた最後の人たちでしたわ。

最後に例の責任者の婦人が私を引っ張り、私はアダムスキーに（もうやめましょうと）促して、人々にこれ以上は質問しないでみな帰って下さいと告げたんです。アダムスキーが外へ出て私たちもみな数台の車に乗り、三人の紳士も出て来て彼らの車に乗って去って行きました。

三人とも地球人と全く同様でした。何か異常な事が眼につかないかな、と思ったのを記憶していますが、私の眼を見ようとしなかった男は普通の背広を着ており、だれしも正装したときは靴をよく磨くもんだけど、その男の靴は他人に知られたくないとでもいうように特別なものではなかったわ。一般の男の靴と全く同じです。

翌日私たちはその婦人の家で非公式な会合を開きました。アダムスキーも昼食に来ましたが、全部で二十二、三名だったかしら――。ほとんど婦人でした。男性は仕事があるから来られないんです。でも四、五人の男の人がいましたわ。この人たちはアダムスキーと一緒に食卓についていて、あとの私たちは椅子に腰かけて盆に皿をのせたりしていました。そしてアダムスキーが語るのを聞いていたんです。

それで私が質問しました。『昨夜、講演会場にスペース・ブラザーズがいたんじゃありませんか？』

するとアダムスキーが答えました。

『ああ、いたよ』

『何名いたんですか？』

『三名だ』

『どんな服装の人ですか？』

『それはあんたが言ってごらんなさい』

そこで私は三人の服装、服の色などを見たとおりに話しますと、

『そのとおりだ』とアダムスキーが答えました。『あの三人の紳士はブラザーズだったんだ』

それ以外の講演のときも私が同席した限りでは、いつもそのブラザーズを見かけました。でも会場ではいつも黙って彼らを見ているだけで、『ほら、あの人はブラザーズなのよ』などとはだれにも言わなかったわ。ブラザーズは人に知られるのを好まないからです。だから相手はこちらの眼を見なかったんだとアダムスキーが言っていましたわ。大勢の人に知られるのを相手は警戒していて、私がしゃべってみんなが騒ぎ出さないようにと思っていたのよ。だってそんなことになると相手はもとの惑星へ帰らなくちゃならないでしょう。だから相手は黙っているのよ。

アダムスキーは過去世を透視できた

アダムスキー自身のことについて話しましょうか。その講演会の夜、私は他の人と同様に彼を見ただけですが、翌日昼食会を非公式に開催したとき、彼は正午から五時までずっといて、非公式な話し合いをしました。私はその家の夫人を手伝っていました。これは私の友達です。私は一カ所に座ったまま昼食をとっていたのではなく、あちこち動きまわっていたんですが、やがて一つの考えが浮かんできました。ダイニングルームのそばの戸口の所に立っていれば、アダムスキーが食卓で話している内容を聞くことができると思ったんです。そこで私はそっと戸口の所に立ちましたら、アダムスキーが左の方へ振り向いて、立っている私を見つけました。彼は私の眼を見つめたのでハッとしたんです。私には全く不思議な体験だったわ。恐ろしいというんじゃなくて、これまで全然知らなかったような体験です。『宇宙船の内部』（「宇宙からの訪問者」第二部）にはブラザーズが他人の心を読みとることが書いてありますが、これは私がアダムスキーに感じたことです。彼は私の想念を読みとったのだわ。しかも私は彼の視線から眼をそらすことができないのよ。やがて彼が向こうを向いて話し始めたので、ほっとしたわ。これと同じ事が三度ばかりありました。そのたびに彼の視線から眼がそらせないの。私はただそこに立っているだけで、まるで宿命を感じているようだったわ。それ以来、彼はアカシック・レコード（記憶の書）が読めるんだということに気づいたんです。（筆者注＝アカシック・レコードが読めるとは、過去世を透視できるという意味である）それで彼は過去世で私たちが（アダムスキーとアリスが）一緒にいた当時のことを思い出して気づいていたんですわ。これは後日彼が話してくれました。別な機会に彼と一緒にいたとき私が言ったんです。

『おかしいわね、アダムスキーさん。だって私はあなたにまだ数度しかお会いしてないのに、むかしからずっと知り合いの古い友達のような気がするんです』

『ああ、そうです。私たちは（過去世で）何度も一緒に働いていたんですよ』と彼が言いました。

その午後、私たちは座って彼の話を聞

いたり、いろいろな事で質問したりしましたが、ずいぶん貴重な機会でした。小グループだと公開講演では聞けないようなことが聞けるんだもの。しかも彼が達成しようとしている事柄の深遠な意義を理解できる人ばかりが集まっていたんですから――。その意味で、すばらしい機会でしたわ」

録音機のマイクを手にしたままアリスは淡々と話し続ける。その語法はきわめて正確で格調高くて、高度な知性を感じさせる。しかし言葉を選択しながらポツリポツリと語るのではなく、よどみなく流れるような調子である。私は尋ねた。

「アダムスキー個人に関してもっと話してくれませんか」

チベットで勉学した

「そうね、あなたはアダムスキー個人について聞きたかったのね。

その会合の後、友達と私は非常な感動をおぼえて彼をニューイングランドへ、マサチューセッツ州へ招待することにしました。そうすれば近辺の人々が講演を聞くことができるし、彼と知り合いにもなれるわけです。そこで彼に手紙を出して、その件を尋ねました。すると、よろしいという返事が来ました。そしてマサチューセッツ州近辺の住民で彼に手紙を出した人たちの名簿を送ってよこしました。それで私たちは名簿に載っている人々に手紙を出して、講演会を開く予定であること、アダムスキーを招待する計画であることなどを知らせました。そしてボストンでグループを結成したんです。たしか二十五名ほどだったと思います。夏中、定期的に集まりました。

資金が十分にありましたので、十月にまた彼が東部へやって来て講演し、八日間こちらに滞在しましたわ。ボストンとこのノースボロで講演しました。それ以外にも少数者のための非公式なディスカッションをやりましたから、公開の席では聞けないような話を聞くことができました。公開講演では哲学と大部分はUFO関係の話が聞けるだけですが――というのは大抵の人が宇宙船について聞きたがるものですから――、数名の人だけの場合は兄弟愛とか、そうした調和の仕方とか、別な惑星での生き方とか、最も重要な部分であるすばらしい事柄を伝えてくれました。こうした小会合は八日間続いて、私が世話役でしたから、アダムスキーと一緒にいる機会が多くあったんです。車に乗せたり、会合に連れて行ったり、ラジオ放送局へ案内したり――。彼と一緒にいられたことはすばらしい特権でしたわ。

これは一九六四年の十月のことで、翌年の三月にまた東部へやって来て私たちと一週間をすごし、ウースターで講演しました。そしてまた小会合をいろいろ開いたんですが、そのときは復活祭の週でそのあと彼はワシントンへ行ったんです。そして一週間後に亡くなりました。私が彼に初めて会ってから一年と少々の後です。彼の生涯の最後になったこの二、三週は私たちと共にすごしたのですが、体は強健でしたわ。顔にはシワが寄って、髪は白くなっていましたから、若者のようには見えませんが、体はたいそう丈夫そうでした。とても背が高くて、六フィート（約百八十センチ）近くあったと思います。眼はほとんど黒色でした。その眼は磁気的というか、人を引きつけずにはおかないような眼でしたわ。人を見ると必ず何かの影響を与えました。一人の婦人が突然泣き始めたことがあります。その人にそういう影響を与えたのです。彼は全くすばらしい人で、あらゆる人を本当によく理解し、他人のことをまるで書物を読むように読みとれたんです。ブラザーズの能力と同じですわ。すばらしい品位と優雅さを身につけていました。彼が立っているのを見ると貴公子のように見えたものです。高貴な態度と美しさを放っていましたわね。いわば、この世のものならぬ高貴さです」

これはカリフォルニアのスティーヴやフレッドたちの言葉と一致する。単なる一婦人の眼で見た個人的感想ではないようだ。

「アダムスキーは少年の頃にチベットにいたということですが、それは本当ですか？」と私はアリス・ウェルズの話の傍証を得るために同じ質問を出してみた。

「ええ、少年の頃にチベットにいたんです。彼のお父さんがポーランドの王子だったということをあなたはご存知かしら――。お父さんはポーランドにいた当時王室の一人だったんです。お母さんはエジプトの王女でした」

これは意外な話だ。カリフォルニアではだれもこんな事を話してはくれなかったゾ！ 私は身を乗り出した。

「ね、だから彼のお母さんは東洋の哲学を教えられながら育ったんです。お父さんはローマカトリックの信徒でした。だからアダムスキーが物心ついてきたときに、両親は両方の教えを身につけさせようとしたわけですわ。そこで八歳になったときに彼はチベットへ送られて、十二歳まで四年間をそこですごしました。ダライ・ラマの住んでいるポタラの宮殿に滞在したんです。修道僧たちと一緒に――。そこでアダムスキーは東洋の哲学や深遠な秘教を教わった後、米国へ帰ってから今度は父親の信仰について理解するためにカトリック教会へ入りました。その教会で伴僧として司祭の助手をつとめたんです。ですから彼は素人にはわからないようなカトリックの深い教えを学んだわけで、司祭たちが研究している書物や資料などを彼も研究したんですよ。したがって私が知っているどんな聖職者よりも彼は聖書をうまく引用していましたわ。

私自身はプロテスタントです。私はプロテスタントの教会によるキリスト教信仰の雰囲気の中で育てられました。聖職者はバイブルについてはよく知っていますが、アダムスキーもそうでした。たとえば、彼は『マタイ伝にはこれこれ、しかじかと書いてある』と言うんです。その知識は驚くほどでした。そういうわけで彼は東洋または東方と西洋とのバックグラウンドを持って成長したんです。

多年のあいだ彼が教えていた当時と、スペース・ブラザーズと共に活動し始め

たり円盤について講演したりするときも彼はこのような背景について話しませんでしたが、これは人々を混乱させたくなかったからです。それで多くの人が彼をイカサマ師にしようとしたり、からかったり非難したりしましたけれども、彼はこの事が（東西の宗教哲学に通暁していたことが）自分を非難するもう一つの要素になるのだろうと感じていました。だからその事については話さず、この生涯中ではほとんど沈黙していました。でも、もう彼は亡くなったのですから、私たちはときどきその事を人に話すんです」

クリスタル・ペンダントは金星から来た

久「アリス・ウェルズがアダムスキーがいつも身に着けていたというクリスタルみたいな物を見せてくれましたが、このことをあなたは知っていますか？」

ア「その写真を持っていますわ。あれは金星から来た物です」

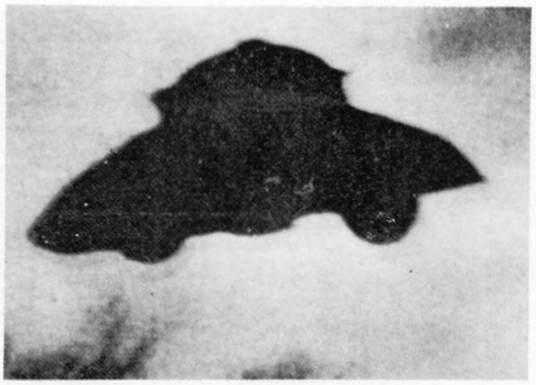
久「金星ですか？」

ア「アダムスキーを援助するためにブラザーズがあのクリスタルを持って来たんです。非常に純度の高いクリスタルで、私たちが地球で持っている水晶によく似ていますが、しかしもっと純粋で透明です。美しい品物ですわ！——直径が七センチ近くあり、厚さは約四センチです。かなり平らにカットしてあり、裏側は丸くて大きな面が切ってあります。講演のときはいつも胸に着けていましたが、若い頃は特にそうだったようです。表側のとがった方を前側にして胸に垂らし、丸い裏面を胸にあてていました（本誌前号か「宇宙からの訪問者」＜ユニバース出版社刊＞ロ絵写真を参照）。表側のとがった部分はブラザーズのための焦点として役立ったんです。ブラザーズは彼が講演中に放射線を送ったんですわ。病気中はあれを身に着けていると、早く治るのに役立ったんです。別段〝魔法的な力〟があったわけではなく、ブラザーズが送る放射線を受信した装置だったわけですよ。たいそう美しい品物です。私はビスタにいた当時、何度もあれを胸につり下げてみました。アリス（ウェルズ）が貸してくれたんです。ときには人に見せるでしょうが、見せないこともあるでしょう」

クリスタル・ペンダントの件も話の内容はカリフォルニアと一致する。やはりブラザーズから与えられたものなのか！ビスタにいたとき、もっとしっかり手に握ってみればよかったのにと、私はあらためて後悔した。

アリスの話はとめどもなく続いて、ビスタのナンシー・アーレイという女性のことや、アダムスキーの葬式の準備とかアーリントン墓地のことなどを詳細に話すが、個人的なトラブルがからんでいるので、ここでは省略しよう。それにしてもアダムスキーの葬式やあと始末などについてはこのアリス・ポマロイが献身的に尽くしたようである。

ロドファー円盤は本物



●この写真は一九六五年、米ワシントン市郊外で、アダムスキーの高弟マデリン・ロドファーが自宅裏庭に飛来した円盤を8ミリ映画に撮影したものの一コマ。

久「マデリン・ロドファーの撮影したUFO映画についてはどうですか？ あれも別な惑星から来た本物の円盤ですか」

ア「ええ、本物です。あれが撮影されたときにはアダムスキーがそばにいたんです。だから本物だということを私は知っていますわ。私は一通の手紙を持っています。マデリンとアダムスキーがあれを撮影したあとで書いてよこした手紙ですわ。——クボタ、どう思いますか？ 日本人は写真術がたいそう達者だそうですが——アダムスキーの円盤写真類をすべて本物だと思いますか？ 正直に言って——あなたの意見を知りたいのよ」

私は返答に窮した。正直に言って、あのフィルムがテレビの四チャンネルから放映されたときは、視聴者から模型によるトリックではないかという批判が出たことを知っていたのである。

久「ウーン——あのフィルムを見たんですがね。何と言ったらいいかなァ——マデリンの映画にはおかしなところがあるんですよ」と、私はシドロモドロに返事をした。疑いたくはないのだが、どうも本物らしく見えない部分もあるのだ。

ア「あの円盤の〝ゆがみ〟でしょう？（と言ってアリスはアルバムのスチル写真を探す。見つけた写真を指さしながら）一方の側（サイド）は釣合いがとれないでこんなふうに写っています。このことですか？ 映画ではこの円盤が上下に移動して着陸ギアも上下しますが、この側ではゆがんでいます。このことを意味するんでしょう？」

久「そうです」

ア「これはフォース・フィールドのためですよ。ね、フォース・フィールドがそんなゆがみを起こすんです」

久「でも円盤の底部が平たいですよ」

ア「それは傾いているからですわ。この円盤と同じですよ（と言って別な円盤写真を指さす）」

久「同じ円盤ですか？」

ア「同じです。ただしマデリンの方は傾いているんです。この円盤をひっくり返せばギアーは見えないはずよ。

アダムスキーの円盤映画だけど、二機

の円盤が同時に運動するあれ、見ましたか？」

久「ええ、見ました」

ア「本物だと思いますか？」

久「思います」

アリスはどうもアダムスキーのUFO映画にはさほど関心はないらしく、むしろ宇宙哲学の面で強く傾倒しているように思われる。

窓外は暮色を帯びてきた。室内には電灯がともされて、明るい光が多くの物の影を織りなしている。この部屋にも螢光灯はない。電気スタンドで照明するのである。螢光灯は有害な放射線を出すから昔流の電球の方がよいということを聞いていたが、そのような知識にもとづいて螢光灯を使用しないのかどうかは不明であるにしても、電気スタンドの柔らかい優美な光をあらためて私は認識し直した。

少し早いけれども夕食にしないかとアリスが言うので、遠慮なくいただくことにした。小さな食堂へ入って丸テーブルを囲む。食卓にはきれいな花が生けてあり、それをアリスが説明して台所へ入った。まもなくおいしいご馳走が出たので賞味していると、息子さんが帰ったらしい。奥の方でアリスと話し合う声が聞こえる。お客様が来ているから行って挨拶しなさい、というようなことをアリスが言っている。

すると入口の所に青年が現れた。丸顔の小男で、三十歳ぐらいだろうか、人の好さそうな顔に微笑を浮かべて「こんにちは」と言うので私たちも挨拶を返した。アリスの説明によると、アランという名の機械いじりの好きな子で、今はトラックの運転をやっているという。顔はどうみてもアリスに似ていない。むしろ父親似なのだろうか。あまりものを言わない朴訥な青年だ。しかしUFOには関心がないらしい。夫君のポマロイ氏もUFOに全く興味がないようで、そのために以前にはよくトラブルがあったらしい。日本の家庭も同じだ。日本GAP会員のなかには、両親が反対するのでニューズレターは友人の家に送っておいてくれという人もある。

ポマロイ氏が食堂へ顔を出したので、少しばかり話し合う。お仕事は何ですかと尋ねたら、教会に勤めているという。顔付きが少しアダムスキーに似ている。このことをあとでアリスに話したら、彼女はチョッピリ嬉しそうな微笑を浮かべた。

食事後また居間へ引き返してアダムスキー問題でディスカションが始まる。そしてアリスは写真やら資料を次々と出して見せて、説明する。その中にアダムスキーが描いたイエスの肖像画の写真があるのを見て、これは私も持っていると言うと、アリスが補足した。

「この絵はアダムスキーが描いたのよ。ああ、ずいぶん美しく描けているわね」

久「たいしたもんですなァ。アダムスキーは相当に描がうまかったんですなァ」

ア「この絵はクリスティーナ・デ・ルェダ夫人に与えられたんです。彼女は自宅に特別室を作って、この絵を飾っていますわ。これを〝マスターズ・ペインティング〟と呼んでいます」

久「今、何歳ぐらいの方ですか？」

どうも私は年齢を聞くクセがあっていけない。女性だとよけいに気になるのだ。

ア「たぶん六十歳だと思うわ」

これは意外だった。クリスティーナはメキシコGAPのリーダーとして活躍した人で、アダムスキーを心から尊敬し、ときどきア氏をメキシコへ招待していたが、私もかつてはずいぶん文通したり情報交換をやったことがある。東京オリンピックのときに大量のオリンピック絵ハガキを記念に送ったら、返礼としてスペイン語の参考書を送ってくれた。十年前のその頃は彼女の若々しい情熱から察してててっきり二十歳代だと思っていたのに――。

宮内氏が質問を出した。

「米国の若い層についてはどうですか。彼らはアダムスキーの哲学をどんなふうに考えているのでしょうか？」

私がこちらへ来て実際驚きもし感心もしたのは宮内氏の英語が実に達者になったことである。失礼ながら氏は六年前、日本を脱出した頃は英語ゼロに近かったのに、何という進歩だろう！ 現地に住んでいればこうまで上達するものなのか。いや、米国に数十年も住む日本人一世で英語がほとんどしゃべれない人もいたというから、いくら現地に居住しても

●アダムスキーが描いたイエスの肖像画。

ヤル気で学習しなければ身につかないものなのだろう。その点、宮内氏は立派なものだ。

さてアリスの話は続いた。それによると、米国は広大な国なので、直接に青少年に接触して指導しないと彼らは十分な正しい知識は得られない。その例としてこうだこうだと、米国GAPの関係者の活動ぶりを説明するが、話はいつしか内部のトラブル問題に移ってしまった。かつてアダムスキーの弟子だったある女性に関して詳細に話したが、その実状は感心できないものらしい。これはビスタでスティーヴやフレッドらが話してくれたことと一致する。そしてその他の内紛をかなり長々と話してゆく。

ケタはずれに偉大な人物が他界したあとは、いずこも同じ秋の夕暮れになることは歴史が示すところだ。

アメリカではたしかにアダムスキー問題は若年層に知られていない。この理由はア氏の書物があまり書店に出まわらないからである。知識の最有力源はやはり図書にあるのであって、これが入手できねば如何ともしがたい。加うるに広大な国土なので、日本の如く小さな町にも書店が二、三軒あって、ひょいとのぞけば欲しい本は何でも手に入るというような環境ではない。日用品を買うにも数マイル離れたスーパーマーケットへ車を飛ばして行くのである。少々書店に本が並んでもそう簡単に入手できるものではない。

アダムスキーは聖書中の重要人物であった！

久「アダムスキーは聖書に出てくる重要な人物と関係があるのですか？」

ア「アダムスキーがこちらへ来たとき、彼はその問題について数名の人に語りました。しかもだれかがその問題で質問したときだけです。非常に重要な問題だからです。理解もせず、自分で考える力もない人に話したって仕方がないでしょう。彼がボストンで講演したとき、これは公開講演ですが、めずらしく聖書の話をしました。これはニューイングランド地方が非常に宗教的色彩の濃い所だったからだと思います。

それから数日後に私たちが私的な少人数の会合を開いたとき、私の知らない一人の紳士がアダムスキーに質問を出しました。

『あなたはイエスや磔刑などについて話しましたが、これはだれかがあなたに伝えたのですか、それとも実際に知っている事柄なのですか？』

するとアダムスキーはその人の眼をジッと見つめて次のように答えたんです」

続いてアリスはある驚くべき話をし始めた。私には全く初耳で、かつて想像もしなかった内容である。世界中の聖書学者も知らないだろうし、また知ったところで一笑に付するだけだろう。この話が事実であるとすればキリスト教史を大幅に書き変える必要がありそうだ。

一体、歴史というものはどのようにして形成されるものなのか、歴史的事実とフィクションとの境目をだれが設定するのか、事物の価値判断をなし得る者はだれであり、権威者とは何を意味するのか——。

アリスからあまりに深刻な問題を伝えられた私は、なすすべもなく、ただ彼女の顔を凝視するだけだった。

宮内氏が「宇宙哲学」の最後の章のリンゴの木の寓話について質問する。アリスの話によると、アダムスキーに会う予定になっていたけれども会えなくなった〝賢者〟は、いわゆるイエスではなくて別な偉人であるのだという。

オーソンはなぜ長髪であったのかと塙君が質問するので、宮内氏が通訳して尋ねた。

ア「あれはたいそう重要なことです。テレビやラジオにはアンテナがあって、電波をキャッチするでしょう。人間の頭髪もアンテナの役目をするんです。だから長い方がよいわけです。ただしいつも清潔にしブラシをかけておくことが大切で油を塗らないで自然のままにしておかないとだめです。そうすると波動が髪を通じて体内に入り、足から外へ出てゆきます。そのために別な惑星の人はあのような長髪をしているわけです。わかりましたか？」

更に宮内氏がブッダ（釈尊）について質問した。

ア「ブッダですか。この文明にはときどき偉大な指導者がやって来ます。ブッダやイエスやアダムスキーみたいに——。その他にも多くの偉人が出ています。こうした偉人といえども普通人と同じように学ぶべきレッスンがあるんです。私たちも何度も生まれ変わってはレッスンを学び、また別なレッスンを学びます。アダムスキーが言っているように、〝内部に宿る救世主である意識のより精化された表現体〟を求めて生長し続けるわけです。

私はブッダのバックグラウンドについては知りませんが、ブッダにしても同じことが言えます。アメリカには、アメリカ・インディアンのある偉大な指導者がいました。これは一種のブッダみたいなものでしょう。どこの国にもこうした偉大な指導者がいて、何度も地上に出現しては教えを伝え、自分もレッスンを学んでゆきます。ブッダはおそらく地球上の最後の生涯を終えて金星か土星か、または別な太陽系の惑星に生まれ変わったかもしれません。地球では十分にレッスンを学んだのでしょう。

アダムスキーはかつてのイエスの十二弟子の一人でした。そしてまだこの太陽系にいる唯一の弟子です。他の十一人はあるレッスンを学んで、今は別な太陽系へ行って人々を援助しています。アダムスキーはまだこの太陽系にいるんですが——だからバイブルでイエスがペテロに言ったわけです。『私が来るまで彼がここにいるとすれば、あなたにとってこれは何を意味することになるか』と。ペテロは今別な惑星にいると思いますが、アダムスキーはずっと地球にいました。

ところでイエスは志願をして地球で生まれ変わり、生長しました。彼は地球で学ぶべきレッスンをもち、伝えるべき教えがありました。そうする自由意志と選択権があったんです。それで志願をして地球へ来たわけです。そして二千年後に

再度一宇宙人としてやって来ました。しかり今度のカルマは地球で誕生して生長する必要はないんです。もっと別なカルミックな負債があったんです。

こうしたことに関連して私が考えていた事があります。私たちは（各国GAPリーダーは）コーワーカーまたはヘルパーとして活動しましたが、アダムスキーは、私たちは過去世で一緒に活動していたことがあるのだと、よく言っていました。だからこそ現在互いにトラブルが起こるんです。私たちは互いに尊敬し合い、協力し合うように学ばねばなりませんが、だからこそ私の知っているどのコーワーカーに対しても運命のフィーリングを強く感じるのです。この人は過去世で知っていた人なのだと――」

アリスは高遠な哲学を滔々と話し続ける。しかもバイブル中の人物との関連を引用しながらの説明であるから、瞠目するような内容で、全く声も出ない。五十七歳にしてはときに少々老けてみえるアリスの声は若々しくて、ますます熱を帯びてくる。その話の内容はカリフォルニアで聞いた事とはいささか次元が異なり、はるかに雄大である。宇宙空間と歴史との関連についてこれほどに深い知識をもつ女性が他にいるだろうか。

ユダは裏切者ではなかった

久「アダムスキーが二千年前にイエスと関係があったということを彼自身があなたに話したのですか？」

ア「そうよ。彼がこのことを会合で話したあと、私はバイブルを調べてみたんです。その会合は私がこの世で彼と会った最後の小会合でした。それから彼は去って行ったんです。バイブルを調べたあとで、私は彼に電話をかけて、そのことを確かめてみました。すると彼は確証しました。その最後の夕食会のときに、彼は次のような話をしたんです。

『イエスの弟子たちはイエスを見捨てたのではなく、兵士たちに捕らえられるのを恐れたのだ。それでイエスを救い出す人はいなかった。ユダはわざとイエスを裏切ったのではない。彼は司祭に金を与えて、イエスがいる場所を教えてやったんだ。すると兵士たちがイエスを捕らえにやって来た。実際にはユダはイエスが捕らえられないように司祭たちを買収しようとしたんだが、逆に司祭から裏切られてしまった。したがって一般のキリスト教信者が信じているのとは違って、ユダがイエスを裏切ったのではない』」

これに類した情報をかねて別方面から入手していた私は別段驚かなかったが、別な意味で複雑な気持がわいてきた。

久「アダムスキーは過去世で日本にいたことがあるとは言いませんでしたか？」

ア「日本のことは聞いていません。中国にはいたことがあると言っていました。古代中国で偉大な思想家だったようですわ。だれだったのかはよくわかりませんが、私自身は老子か孔子、あるいはそのたぐいの人ではなかったかと思います。

私は老子の教えに関する書物を持っているんです。それには老子が真実の偉人だったのか、それとも古代の各種の哲学を寄せ集めたのか、という論考がありますが。だけど私がこの書物を取り出すときは同じ運命のフィーリングを持つのよ。つまりアダムスキーは老子であったか、またはその教えを伝えた人々の一人であったかということです。でもこれは三千年も大昔の古代中国のことですから――そう感じるだけですわ――」

アリスは急に涙ぐんで声をつまらせた。古代中国でア氏と共に活動していたというリーディングを思い出したのか――。

カタストロフィーについて語る

久「未来のカタストロフィー（破滅的な大変動）についてアダムスキーはあなたに話しましたか？」

「ええ、何度も聞いたわ」とアリスが強調する。私は身を乗り出した。オシッコをしたくなったが、今はその場合ではない。話の流れにはリズムがあるので、中断させると横道にそれる恐れがある。

「これからお話しするのは未来の大変動に関する事です。私たちはそれを二通りに解釈する必要があります。だれしもあるレッスンを学んで、そのために苦しむならば、それは一種のカタストロフィーなのです。ね、どの惑星でも自然の法則に従って生きなければ、それはカタストロフィーです。一般的に言えば、ブラザーズはアダムスキーに語り、そして証拠はいっぱいあるんですが、私たちの文明は崩壊の道に進んでいます。非常に少数の人が高度な惑星に生まれ変わって、それを切り抜けるでしょう。そうね……ブラザーズは惑星自体に影響を与えるようなスケールで大絶滅を起こさせないでしょう。言い替えれば、もし大戦争が起これば地球人の絶滅を傍観するでしょう。そのような戦争が彼らを悲しませるものなら、地球人を助けて良い道を示しているはずです。だから地球人が互いに殺し合うだけのことなら手をくだしません。ところが、その戦争が惑星そのものを破壊するほどのものであれば、それはブラザーズの惑星や住民にまで影響を与えますから、そんなことはさせないでしょう。

ですからカタストロフィーというのは各人にかかっています。自分自身で苦しむ事、それをどのように学びとるかということ、どんなカルマを背負うか、といったことです。カルマというのはあなたがたには親しい言葉でしょう。どの国にとっても、どの文明にとっても同じことです。それは必ずしも全世界に絶滅があるという意味ではありません。以上がアダムスキーの話してくれたことです。

エジプトのピラミッドに古文書があって解読されましたし、そこで発見された物は歴史的な出土品になっています。言い替えれば、だれがそれを書こうとも、書いた人は間違いないと思っていたわけです。で、それによると西紀二千年後には何も残らないというのだそうです。言い替えれば、これは宗教界の人々が言うセカンド・カミングで、そのときに地上に平和が訪れる、あるのは平和だけで、人間はいないんだそうですわ（笑う）。こんなことを言えばおかしいかもしれな

いけど、うわさですが、予言類によればあと二十五年すれば何も残らないというんです。

私が考えるのに、現在の中東の状勢がその状態のポイントだと思うんです。アダムスキーがこちらへ来たとき、ボストンの近くに住んでいる若いユダヤ人の夫婦に私は初めて会いました。その女性と私はたいそう親密になりました。そしてこうした問題を数時間も話し合ったんです。彼女はずっと探求を続けていて、理解したらしいんですね。私たちは過去世で親しかったんだと。それで私は彼女の言葉から現状に関してイスラエル側の見方が全くよくわかったんです。奥さんはシリア人で、旦那さんはレバノン人ですから二人ともアラブですが、二人から実状がつかめたわけです。二人の部屋にはクェーカー教徒が書いた小さな本があるそうで、平和と同胞愛と人類平等を信じており、世界中にクェーカーの団体を持っています。中東の権力者はクェーカー教徒に問題解決の道を見い出すよう要請しています。それでクェーカー教徒の一グループは他宗の政治的宗教的な重要人物に数年間話しかけました。それは大変興味深い本で、政治、宗教、その他あらゆる面から説いてあり、今は何も持たないパレスチナ人の現状も述べてあります。彼らの物は彼らから取り去られたんですが、ユダヤ人は土地は自分たちのものだと考えています。土地を失ってしまって、アラブ人がずっとそこにいたからですわ。

私は考えるんですが、意識や生命には三つの部分をあらわす三つの物があるようですわ。一つは〝存在するある物〟、二番目はそれを表現する形態(フォーム)、三番目はそのすべてを働かせるエネルギーです。中東の闘争もこの三つの物のコンビネーションです。中東の各国はまさしく自分たち自身でやっているのと同じことを他国に例をあげて非難しているんです。

私たちの〝ブラザーズ〟というのは実際は地球の同胞ではないでしょうか！この数年間、私はこのことをうんと体験しました。ですから間違っていると思われる事をしたり言ったりする人々を見て、しかも自身の内部で『おまえもそれと同じ事を(間違った事を)やっているじゃないか？』という小さな声を聞いたりすると、すごく自分が謙虚になってくるんです。人間はこの点で欠けているということを卒直に認める必要がありますわね。これこそ私たちの現状を打開するキイですわ。私たちが本当に進歩しようと思えばカタストロフィーはきません。でも一般的な意味で言って、文明は崩壊してゆくと思います。――何かが起ころうとしていると――」

アリス・ポマロイの熱を帯びた言葉が静寂な室内で響き渡り、私たちは黙然として聞き入るだけである。

またカタストロフィーという言葉が出たので、私はケイシーのことを思い出した。カリフォルニアで聞いた事なのだがこちらのアリスの意見も聞いてみようと思って尋ねてみた。気にする必要はないのだが、なるべく多くの人の意見に耳を傾ける態度は大切である。

やはり「ケイシーはダメだ」という

「エドガー・ケイシーによれば、日本は大変動のために近い将来、海底に沈むということですが、これについては？」

ア「エドガー・ケイシーは心霊的(サイキック)です」

まず言下にアリスは断言した。これはカリフォルニアのグループの説明と一致する。アリスは続けた。

「私は彼の言った事柄のいくらかは尊重していますが、彼が得た情報のすべてはゆがめられています。彼自身の理解力によってね。私は彼の著書を研究して、以前に出していた機関誌に論文を書いたことがあります(筆者注＝アリス・ポマロイはかつてラウンドレターと題するUFOと宇宙哲学の機関誌を出していたことがある)。そして次の号に宇宙的な愛の見地から同じ情報を分析した論文を載せましたわ。両方を比較するためです。それで、彼が四万ないし六万年ごとに自然が変化するという意味でのカタストロフィーという点では正しいと思います。地球は古びていて海洋は溢れています。……太陽に対する諸惑星の関係は逆になっています。人間も同様で、ある種の物事に対してポジティヴがネガティヴになりネガティヴがポジティヴになるような態度を示して逆になっています。ケイシーが言っていることは、自分で気づいているかどうか知りませんが、このような自然の状態を言っているのだろうと思います。アダムスキーもこのような大変動は来るし、これはスペース・ブラザーズが地球へ来る目的の一つだと言っていました。この地球で発生する異変のシルシを観察したり、いつ発生するかを知ったりするためです。

というのは、大変動が起こったとき、それは本当のカタストロフィーになるかもしれないからです。一般的に言って、現在の陸地は海になり、海のほとんどは陸地になるでしょう。北大西洋のアイスランド沖にあるセルティ島は今爆発している新しい火山島ですが――このことを聞いたことがありますか――私はこれが大変動の始まりだろうと思っています。海底が隆起しているのだと思いますわ。

アダムスキーも言っていました。アトランティスは太西洋の海底に沈んでいる。かつて太西洋は陸地であり、それがアトランティスだった。またミュー大陸もあった。――ジェームズ・チャーチワードの書物を知っていますか？――太平洋諸島、ハワイ諸島、フィリピン諸島、その他の小さな島々は、かつてのミュー大陸の山々の頂上です。したがって私たちが理解するならばこれは生命の自然の一部分であり、それでブラザーズが観測するわけです。この種の大変動が彼らの惑星上で発生すれば、彼らは宇宙船に乗って安全な惑星へ移動するでしょう。彼らには(大変動が)来ることは事前にわかりますから準備できるんです。したがって彼らにとってはカタストロフィーはありません。

宇宙の法則を探求するのは私にとって最もすばらしいことでした。最初私はアダムスキーのティーチングを何度も研究

し、次に自分自身の印象を得るようにしました。アダムスキーは言いました。

『自分が自分自身の教師なのだ』と。また何度も次のように言っていました。

『私はあんたに何も教えることはできない。あんたが自分の内部に持っている物に気づかせるだけだ』

ブラザーズも私に印象を与えているんです。あるとき三日二夜眠れないことがありました。夜はベッドに横たわり、昼は外を歩いたり樹木の下に座ったりして四つの基本的な力の相互関係を理解しようとしました。これは書物で学んでもどうしても理解できなかった事なんです。長い時日を要しましたが、結局わかったんです。彼らが私に教えたんです。なぜならその相互関係が存在するということを彼らは内部で知っているからです。

それでビスタから帰ったあと、世界全体が開けてきました。生命が自分の内部にあるということがわかれば、自分の疑問に対する解答を自己の内部から引き出せるのです。そのとき私は万物の一体性とその相互関係を悟ることができました。ですから個人にとってのカタストロフィーは基本的には同じ原理に従うのであって、一惑星または太陽系のカタストロフィーと同じ法則があてはまるんです。

宮「アダムスキーはエドガー・ケイシーに関して何か言っていましたか？」

ア「サイキック（心霊的）だと言っただけです。アダムスキーはこうした種類の人々に対してはいつも非常に寛大でしたわ。彼はジーン・ディクソンについても言ってました。例の女予言者です。アダムスキーによれば、いわゆる予言者の言葉は真実なのもあるし、本人の理解力の欠乏や特殊な理解力のためにゆがめられたのもあるということです。また彼らが有名になり始めると、そのことがエゴに影響を与えて、自分は重要人物なのだと感じるようになり、あらゆる事をゆがめ始めるんだとも語っていました。言い替えれば、最初彼らは真実の予知を得たりするんですが、あとになるとそれを脚色するようになるんです。これは彼らが自分の名声とエゴにおぼれてしまい、内部の声を明瞭に聞かなくなるからです」

本物とニセ宇宙人を見分ける方法

宮「アダムスキーは未来について何か言っていましたか？」

ア「いいえ、彼は一般的な意味で次のように言ってました。『人間は自然の法則に従えば未来を予知できる』と。そうかもしれませんが、別な意味で言えば、人間は〝心（マインド）〟というものを知らず、そして自分が何をやろうとしているかを知らなければ予知はできないとも言っていました。たとえば、現在の世界状勢を例にあげますと、早晩中東かどこかで爆発して戦争が起こるでしょう。しかし本当の賢人が出てきて、人々が戦争を回避することに耳を傾けないとは、だれにも言えません。正確に言えばだれにも予知はできませんが、一般的に言えば、できます。アダムスキーは特にスペース・ピープルに関してはっきりと言っています。自分たちはスペース・ピープルだと名乗る人々がやって来るだろうし、自分たちはどこそこの惑星から来たんだ、これこれの事が発生するぞと言うだろうというんです。大変事が発生するだろうと彼らが告げ始めたとたん、それが本物のスペース・ピープルでないことがわかります。なぜなら、本物のスペース・ピープルは地球人が発生する変事について予知できないことを知っているからです。私たちが非常に混乱しているのは〝心〟が混乱しているのであって、私たちは実際には自分自身を知らないのですわ」

久「第三次大戦についてはどうです？」

ア「私にはわからないわ。世界を破滅させるような戦争はないと思うわ。あちこちでの爆発はあるでしょう。これは私の意見にすぎませんが、アダムスキーはこれについて何も言わなかったものの、この十年間に多くの戦争が起こっていますので、局地的な戦争といえるようなものはあるかもしれないけど、ソ連、中共、米国などが大戦争を望んでいるとは思えないわ。今度戦争が起これば、勝者というものはいないでしょう。核兵器を使用すればすべてを失うだけですものね」

宮「アダムスキーの本によりますと、地軸が傾くと書いてあります。アダムスキーはこのことでもっと詳細に送べていましたか？」

ア「いいえ。アダムスキーがこちらへ来た頃は、まだブラザーズは調査していたんです。惑星は太陽に関連してその磁極を変えます。これは自然現象で、ブラザーズが地球へ来たときはこれを観測していたんです。アダムスキーが去って行った当時、ブラザーズにも結論は出ず、やはり観測を続けて発生時期を調べていました」

宮「いつ起こるかをブラザーズが知ったとすれば、私たちに伝えてくれるでしょうか？」

ア「伝える方法があれば伝えるでしょうし、宇宙船があれば飛来して私たちを救出するかもしれません」

宮「ほう、そうですか？」

宮内氏は嬉しそうな声で聞き返す。ただしアリスの答で「私たちを(us)」というのは地球人全体を意味するのか、それとも我々少人数のグループを意味するのかは尋ねそこねた。

ア「ええ、私はそう信じますわ。アダムスキーは言っていました。『彼らは来ませんよ』と……。たぶん各地にコンタクトマンと称する人々がいて――日本にもいるかもしれませんが――、次のように言うかもしれません。

『大変動が発生するから私たちと一緒に来なさい。ブラザーズが宇宙船で救いに来てくれます。もし私たちを信ずれば、あなたを救出してくれますよ』

こんなことはウソです。しかし本物のブラザーズは大母船でやって来て、だれに対しても次のように言うでしょう。

『大変動が来ます。私たちと一緒に行きたければ、連れて行きましょう』

彼らは（特定の人だけでなしに）だれにも味びかけるでしょう。だって万人は兄弟ですし、アタマのある人なら彼らと一緒に行くでしょうから――。特定の人

だけに呼びかけることはしないでしょう。おまえは善良だから連れて行ってやる、おまえは別な事を信じているから連れて行ってやらない、というようなことはブラザーズはしないはずです」

宮「これは私の意見ですが、もし核戦争があればブラザーズは地球人を助けるだろうが、それが自然のカタストロフィーならば、彼らは助けないんじゃないのですか」

ア「違います。全然逆です。ミヤウチ。もし自然のカタストロフィーならば、それは人間の過失ではありませんから、彼らは最善をつくして地球人を助けるでしょうが、地球が自身の手でカタストロフィーを起こすならば、自分でその苦しみを負わねばなりません。これはカルマです。ブラザーズはこれに干渉できないんです」

宮「そうですね。それはわかっていますが、私の意見は、もし核戦争が起これば、それはたぶん私の過失ではなくて、政治屋、誤った経済、または悪人がやることでしょう。でも自然の物事は……私は生まれ変わりを信じますので死ぬことを恐れませんが、戦争で死にたくはありません。戦争は他人の過失です。だからそんなふうに考えたわけです」

ア「あなたのおっしゃることはわかりますわ。この問題は私たちには簡単に理解できませんが、私たちは自分のカルミックな背景を持っています。生まれ変わりや学ばねばならないレッスンなどがあります。ところで、もし核戦争が発生してあなたは何も悪い事をしていないのならば、なんとかして逃げるでしょう。戦争が起こってもあらゆる人が死ぬわけではないんですから――。人々は国のために尽くすでしょう。ブラザーズが援助することによって安全に国へ帰れる人もあるでょうし、死ぬ人もあるでしょう。ですからその意味でならブラザーズは地球人を守るでしょうが、私たちが自分のカルマに従えば、自分のおかした過失に苦しまねばなりません。このことを理解するのはむつかしいのですが、ブラザーズはそういうふうに見ています。これはバイブルにも述べてあります。『ある人は連れて行かれ、ある人は残されるだろう』と。そして『夫は連れていかれ、妻は……』。どんな状態になろうと私たちにはわかっています。しかし私たちが誤りをおかさなければ早晩良いことがあるでしょうし、他人を傷つければ、それに気づこうが気づくまいが、代償を支払わねばならないでしょう。

つまり二通りの道があるんです。もし過失をおかしてそれに気づかない場合、わざとやったことではありませんから、代償はさほどきびしくはないでしょう。だけど、悪い事だと知っていながら何かをわざとやるならば、代償は大きいでしょう」

ブラザーズは軍人にコンタクトしない

久「日本でこういう噂があるんです。アダムスキーは真実のコンタクトマンではなくて本当のコンタクトマンは米空軍の高級将校で、その人が書いた体験記にアダムスキーが名前を貸したというんです。つまり、〝同乗記〟はたしかに他の惑星から来たスペース・ブラザーズの存在を伝えているけれども。真実のコンタクトマンは米空軍の将校だという噂です。これについてどう思いますか？」

ア「私はその噂に同意できません。私はアダムスキーこそ真実のコンタクトマンだと思います。アダムスキーは繰り返し次のように説明していました。『スペース・ブラザーズは軍人や政界の指導者に故意にコンタクトしない。なぜなら、こうした人々はブラザーズの言葉を聞こうとしないし、聞き入れたところで一般人へそれを伝える方法を持たないからだ』と。アダムスキーは民間の普通人であり、むしろ軍部や政界のリーダーが彼に黙らせようとして圧力を加えるのに対抗して絶えず闘っていました。アダムスキーこそ真のコンタクトマンであって、彼はブラザーズからのメッセージを政界の指導者へ伝えたのです。ときには政界の指導者がブラザーズに話したことがあるのではないかと思います。アダムスキーはブラザーズと世界の政府間との公の橋渡しをしていたのですから――。そう、私は固く信じますわ」

久「これは単なる噂ですから、気にしなさんな」

久「ずいぶん多くのデマが出てきますわね。アリス・ウェルズが言っているように、あらゆる人が時流に乗ろうとしていますわ。アダムスキーは特にある男について語っていました。その男はコンタクトをした、円盤にも乗ったと称していたんです。その人はブラザーズが連れて行って乗せてくれたのではなく、砂漠に着陸した円盤の中へ入り込み、内部を見せられたというんです。また、アダムスキーがどこかへ講演に行くと、二週間後に他の男が同じ場所へやって来て講演をするんです。絶対に事前には来ないで、必ずあとになってやって来て、アダムスキーの名声を利用し、そして自分の方へ注意を引かせていました。こんな人間は他にも沢山います。

ニセ宇宙人はカタストロフィーを語る

アメリカには、アダムスキーの著書を読んだだけでUFOについては何も知らない人たちが書いた書物がずいぶん多くあって、それらは自分の想像をつけ加えて焼き直したものなんです。沢山の人がこれこれのUFO関係書を読んだといって私に手紙をくれます。あなたはどう思いますか？　基本的な事を理解していれば、どれが本当でどれがウソかはわかるはずです。その見分け方をいろいろとアダムスキーは話してくれました。もしUFO書や自称コンタクトマンたちが人間の悪い運命やカタストロフィーなどを語り始めて『私について来なさい。あなたを助けてあげよう』などと言ったとしたら、もうそれがどんなものかはわかります。なぜなら、ブラザーズは私たちやアダムスキーに次のように言っているからです。

『私たちはみんな兄弟であり、私たちは（ブラザーズは）万人を愛していて、こ

の人は私たちの言っていることを信じているから助けてあげよう、あの人は信じていないから除外しよう、というようなことはしません」と。

またアダムスキーが話してくれた見分け方として、ブラザーズは地球人のように名前を用いないということです。彼らは正体を明らかにする場合、別な方法を応用するんです。ですから宇宙人と称する人間がやって来て、自分はどこそこの星の王子だとか、長ったらしい名前を告げたり、どこそこの太陽系または何光年彼方の星座から来たと言ったりすれば、ウソであることがわかります。本当に来たものならそんな説明をするはずはありませんもの。真実のブラザーズはそんなことをしません。ニセ宇宙人はいつも地球人の悪しき運命とカタストロフィーについて語るんです」

アリスは熱をこめて語り続ける。これまでに多数のコンタクト・ストーリーが出版されて、妙な名の宇宙人や星などが出てきたことは私もよく知っているが、これらはほとんど偽作だということらしい。アダムスキーの著書に刺激されてこれをネタにしたフィクションが一時期氾濫したことは以前からいわれていたことである。

窓外には夜のしじまがたれ込めて、室内は静寂な空気に満ちている。森や林に包まれた区域だから、自動車の音などは全然ない。

アリスは立ち上がって、また快活な態度に返った。夜も更けたから行ってやすめと言う。一同は立ち上がって荷物をとのえたあと、家を出た。寝所はあらかじめ手配してあったらしく、隣家の妹さん夫妻の家に宿泊することになっているのである。

クック家を訪問する

外へ出ると真暗闇だが、家の窓から洩れる明りで地面はかすかに見える。隣家といっても約五十メートル離れており、その間は草原である。いったん道路へ出て右折すると、白塗りの家が前方に浮かびあがった。これがアリスの妹のメリーとその夫君クック氏の住居である。入口まで行ってギョッとした。なんと骸骨の模型がぶら下がっている。魔よけに吊り下げているらしい。

中へ入って右手の居間へ案内されるとまもなくクック氏とメリーが出て来て挨拶をされる。六尺豊かな大男で、直感的にこの人は警察関係者ではないかと思ったが、果たして警官であることが後にわかった。しかし非常にきさくな方で、一同がソファにくつろいでから、いろいろと話されるが、その態度はきわめて友好的で、構えたところは全くない。いったいに日本人の親切さには相手の腹を探りながらの一種構えた姿勢があるが、アメリカ人のそれは実に率直で、できるだけの好意を示した上で相手が気にいらねば仕方がない、というようなあっさりした親切さである。メリーも陽気な、人の好さそうな婦人で、よく笑いながら丁寧な応待をしてくれる。お土産物を渡すと白人流にその場で開いて、実に嬉しそうな

●クック家の居間にて。左より宮内氏，メリー，クック氏，筆者，アリス，塙。

素振りを示す。全く心温まるような雰囲気だ。夫妻にしても日本人三名を宿泊させるとは稀有の〝珍事〟だろうし、それだけに気を使ったのだろうが、わざとらしい仰々しさはみじんも示さない。これが米人にとっては普通なのだろう。といってすべてのアメリカ人がみなポマロイ家やクック家のような人でもあるまい。その辺りは米国に多年住んでみないと実態はつかめぬだろう。

やがて就寝時刻がきて、私たちは奥の部屋へ案内された。私は夫妻の寝室の巨大なダブルベッドを借用し、宮内氏と塙君はそれぞれ別室をあてがわれた。この中へ服を吊り下げておけとアリスから指示された洋服ダンスをあけてみると、あるわ、あるわ、夫妻の各種の服が数十種類ぎっしりとつまっている。旦那の皮の長靴やら種々の型の靴までが押し込んである。夫妻は階上のどこかでやすむらしい。アリスが Good night! と言って出て行ったあと、とても眠れそうもないので、ふたたび居間へ行くと宮内氏もいたので、ここでしばらく話し合ったあと、寝室へ引き返して寝た。

熟睡した翌朝、起きて洗面をすませ、ダイニングキチンの方へ行くと、すでに宮内氏がメリーと話し合っている。私の職業について彼女が尋ねていると宮内氏が言うので、名刺を出して更めて自己紹介する。UFO専門誌を出していると説明したが、メリーはUFO問題にさほどの関心はないらしい。つまり姉妹の好みは全く違うのである。居間に座って塙君と話したり右往左往していると、やがてアリスが迎えに来た。朝食をとりに来いと言う。一同はまたアリスの家へ行って食堂へ入り、雑談を交わしながら簡単な朝食をご馳走になったあと、同家の居間へ移動して、ここで再びアダムスキー問題の討論に入った。アリスはアルバムなどを持ち出して説明しながら答える。

サイレンス・グループの暗躍

久「キャロル・ハニーについてはどう思いますか。彼はアダムスキーのことをずいぶん悪く言っていましたが――」

ハニーというのはかつてアダムスキーの助手として信頼された人であるが、どういうわけか離反して、逆に攻撃するようになったGAP間の問題の人である。しかしアダムスキーが他界したときに、彼が独自で出していた機関誌にア氏の写真を一面に大きく掲載して哀悼の意を表していた。いつの頃からか消息不明となり、その後、音沙汰はない。

ア「キャロル・ハニーやルーシー・マクギニスのことは知りませんので、自分だけの理解でしか言えません。アダムスキーがよこした手紙類から判断しますと、現在コーワーカーの間で基本的に同じ事が起こっていると思うんです。アダムスキーが〝反対派〟と言っていた基本的なパタンの存在することがわかるわ。真実を一般に知らせないようにしようとして彼らが（反対派が）応用している基本的パタンです。大抵の人は、あちらに反対派がいる、こちらには真実を知っていると称する人がいる、さてそこで、どちらに耳を傾けようかな、と考えますが、私は逆だと思うんです。真実が表面に出るのを妨げようとする人々のグループがあります。そうすると、このグループはアダムスキーに接近して或る事を言い、更にハニーに近づいて全く反対の事を言うかもしれません。そのために両者間に混乱が生じます。

重要なのは〝どちらが正しいか〟ではなく、反対派が混乱を起こして、真実が広まるのを妨げたことにあります。ハニーとアダムスキー間は特にそうです。ハニーは非常にまじめな人で、一生懸命に努力したのだろうと思いますが、過失もおかしたと思うんです。しかしアダムスキーも過失をおかしたと思います。たしかにアダムスキーはまじめで熱心な人で人類を援助するために全生涯をささげた方ですが、彼もやはり過失をおかしたと私は思いますわ」

久「フーン」

ア「アダムスキーはハニーについて何かを声明したでしょうが、それは全部が全部真実ではなかったかもしれません。そしてハニーがアダムスキーに関して実に不愉快な事を広めようとしたのも当然ですわ。これが、二人の両者間の相違を知って、ひずみを直そうとするための唯一の方法です。私はオーストラリアのリリー・サリンスキー（かつてのGAPコーワーカー）から送られた論評を読んだことがあります。これを書いた男は当時アダムスキー側のコーワーカーでしたが、ハニーとのトラブルが起こってからはハニー側について、アダムスキーから離れてしまいました。これは典型的な例です。その論評で彼が書いていることは、アダムスキーやアリス・ウェルズの言っていることとかなり違っているんです。だからこれはどちらが完全に正しくて、どちらが完全に間違っているということよりも、二人のあいだの単なる混乱だということがわかります。このことがこちらのGAPグループ間で起こったわけです。私は××のコンタクトが本物だと信じたために失敗しました。それが正しいものであろうと間違ったものであろうと、発生した事柄が非現実的なことであろうと、それは別問題として、私と△△△とのあいだに摩擦が生じました。××がワシントンへ行ったとき、彼がコンタクトによって伝えられていた内容は○○と□□とがコンタクトしたと称する内容によって確証されたんです。だから、この三人は意見が一致したわけです」

続いてアリスはアダムスキー亡きあとの米国GAP内で発生した種々の事件やトラブルについて詳細に話した。結局、ある種のサイレンス・グループが暗躍して切り崩しを図ろうとしたこと、何者かのニセ宇宙人グループが巧妙な手段によって分裂を引き起こそうとして活動し、数名のメンバーがそれにひっかかったということらしい。それでアリス・ポマロイはカリフォルニアのグループからも分離して独自な活動を展開し、ラウンドレターと題する個人機関誌を数年間発行し続けたが、健康を害したり経済的理由などのため、それも中止したのである。

世界に横行するニセ宇宙人の背後には

恐るべきグループが存在し、実に巧妙な手口で真実のブラザーズとそのスペース・プログラムを妨害しているらしいことは、私も二、三の事件でそれとなく感づいてはいたが、いまアリスの話を聞くとまことに慄然たるものがある。こうなると、いわゆるコンタクト事件が発生した場合に、地球的規模のカタストロフィーや信ずる人のみを救助するというような〝宇宙人情報〟が耳に入ったとしたら、まず疑ってかかる方が賢明だろう。特にケイシーの予言が基盤となって日本列島沈没説がささやかれており、各種のコンタクト事件にもこれに関連した〝宇宙人情報〟が流れている。しかもこの沈没は数年後に起こるという噂が多い。小国とはいえ日本列島全体が海底に沈下するとは数万年に一度の大事件であり、日本民族にとっては大変なことだが、私の知る大超能力者の亀田先生のお話によると、そんな事は全然透視したこともなければ夢想もしなかったということだった。一体、何がどうなっているのか見当もつかないが、何事が発生しようとすまいと、要は自己のマインド(心)を創造主の英知・パワー・意識に限りなく近づけてエゴをなくし、現在の一瞬一瞬を愛に徹した宇宙的な生き方をすることが最重要なポイントではないだろうか。人間の短い一生涯にはいつか終焉が来る。如何にジタバタ騒いでもこれだけは逃れられない。二、三十年の生涯も百年の生涯も五十歩百歩である。とすれば、宇宙的人間として精一杯に奉仕的な生活をし、隣人を愛し、絶えず高次な想念を保ちながら、時期が来れば従容として他界し、更に高度な惑星に生まれ変われば、それでよいのではないだろうか。

「オーソン」の意味

あれこれと渦巻く想いにかられながら次の質問を出そうとするが、なかなか思いつかない。ふと「宇宙からの訪問者」に出てくる宇宙人の名が浮かんできた。それで尋ねてみると——

ア「あの人々の名前(もちろんアダムスキーがつけた仮名である)はそれぞれ重要な意味があるとアダムスキーが言っていました。しかし婦人たちの名前のことは何も言わなかったわ。オーソンというのは〝真理〟を意味するんだそうです」

このオーソンという名を日本のUFO関係図書でオルソンと表記したのがあるそうだが、これは誤りである。私が米国で会ったアダムスキー関係者のいずれもそんな発音はしていない。ただし「ソ」は日本語の「ソ」音ではなく、舌の先をかるくかんで発音する th-sound である。こんなことは中学生でも知っているだろうが——。

久「それで?」

ア「ファーコンという意味は知りませんわ。ラミューというのは〝ミュー大陸のラ〟という意味で、〝ラ〟は当時の偉大な指導者の名前だそうです。

私が感じるところでは、ラミューという人はミュー大陸にいた指導者の一人だと思います。言い替えれば、この惑星の母なる国ですわ。ファーコンという名前をどうしてつけたのか私にはわかりませんが、何か宇宙とか天空とかに関係があるんじゃないかしら。ファーコンは火星から来た人だと思います。たぶんラミューやオーソンほどに高い進化をとげてはいないでしょう。しかしよくわかりません。私はこの人が典型的な宇宙人をあらわしているのではないかと思うんです。

私の名のアリスというのは真理という意味で、エリシアというのもそうです。ですからアリス・ウェルズ(ビスタのアダムスキー財団理事長)とアリス・ポマロイというふうに二人のアリスがいるのは意義深いですわ。私のミドゥル・ネームの〝バーサ〟というのは〝輝かしい〟という意味で、したがって私の名前が、アリス・バーサ・ポマロイというのは〝輝かしい真理〟という意味になります。これは個人的な事ですが、私にとっては貴重なんです」

ここでアリスは家族のアルバムなどを持ち出して説明する。見事に整理された部厚な数冊のアルバムに、ぎっしりと親類縁者の写真が収めてある。一体にアメリカ人は血縁意識が強いのだろうか。この家のあちこちの壁にも家族や親類の写真が額に入れて飾ってあるし、昨夜泊めてもらったクック家もそうだった。私が就寝したクック夫妻のベッドルームの壁には結婚式当日とおぼしき若いカプルの写真が飾ってあったので、そのことを尋ねると、あれは妹のメリーとクック氏のウェディングのそれだという。その写真では若き日のメリーがすごい美人で写っていた。

続いてアリスは米国の政界の内幕とUFO問題との関連について長々と話し始めた。その内容は大体カリフォルニアでフレッド、イングリッド、スティーヴらから聞いた話と一致する。この荒廃した惑星地球の泥沼状態をまたもや想起せざるを得なかった。

このあとパロマー・ガーデンズ時代のアダムスキーと、ブラザーズの援助について語ったが、これもアリス・ウェルズの話と同じ内容である。アダムスキーはごく少数の人にだけ重要な事実を洩らしていたらしい。

いつしか時刻は昼近くなり、あらためて昼食を出そうかとアリスがすすめてくれるが、朝食が遅かったために空腹感が全く起こらない。それではお茶でも飲めといって、日本茶を出してくれる。こんな場所で日本茶にお目にかかろうとは予想しなかったので、おいしくいただいた。

郊外へのドライブに出る

あれこれと雑談を続けているうちにアリスが郊外へドライブに出ようと言う。運転は息子さんのアランにさせる手筈がととのえてあるらしい。雨の降りそうなどんよりとした曇り日なので、あまり気がすすまなかったが、折角来たからにはニューイングランドの晩秋の風景を鑑賞するのも悪くはあるまいと思い、結局出かけることにした。

仕事をして家の前に出るとアランも来ていたが、都合が悪くて行けないらしい

●運転するアリス。

ので、アリスが運転し、私は助手席に並んで座り、後部席に宮内氏と塙君が乗って郊外地の山間部へ飛ばして行った。

すでに紅葉の時期をすぎて木々は白々としているが、カシの巨木やその他この地方特有の樹木が密集する森の中のドライヴウェーを走り抜けるのは、なかなか爽快である。家はまばらで、数百メートルおきに一軒ずつという過疎地である。これらの家はすべて英国風スタイルで、カリフォルニアとは全く趣が違う。おもしろいのは屋外に乾かしてある洗濯物の吊り下げ方で、日本人はシャツの袖を物干ザオに通して〝正立像〟にするが、彼らはシャツその他をサカサにして、すその方を洗濯ヒモにとめてぶら下げている。

車は次第に湖の方へ進んで行く。何の変哲もない広大な水面が展開してくる。道路ぎわの標識を見て、これはワチューセッツ湖というのであることがわかった。この湖の近くにワチューセッツ山というのがあり、ここは冬季にスキー場として賑わうのだとアリスが説明する。そのリフトのふもとの駐車場とおぼしき広場へ出て車を降り、しばし休憩する。空気が実に新鮮で、さわやかであり、思いきり深呼吸すると骨のシンまで清純な活力に満たされる思いだ。これが快晴だったらすばらしい行楽日和だろう。

やがてまた車で元の方向へ引き返し、丘々の間をうねる道路をぶっ飛ばして、ノースボロの町の方へ出て行く。途中、鉄道線路があったが、アリスは一時停車などどこ吹く風とばかり平気で通過するので大いに驚き、なぜ線路の前で停車しないのか、日本でなら処罰されるだろうと言うと、彼女、高らかに打ち笑っていわく、あの線路は一日に一度しか汽車が通過しない、ゆえに一時停車の規則などは無用であるが、スクールバスだけはそれが義務づけられていると。なるほど自動車の普及した国だ。汽車などはもはや時代遅れなのか。対列車関係交通規則のきびしい日本がそれだけにまだ後進国なのかもしれない、と私は身の不明を恥じた。

車はノースボロの市街地へ入った。建物は純英国風だとアリスが説明する。そういえば鉄筋コンクリートの近代的なビルなどは全く見当たらず、郵便局までが教会とみまがう古めかしい建築物だ。ノースボロは辺鄙な田舎町だが、アリス一家がここへ移住してさほどの年数はたたないのに人口はこれこれに増加したと町の〝発展ぶり〟を彼女が話す。しかしスーパーマーケットが眼についた以外店らしいものがあまりない。日本のようにすぐ近所に雑貨店や各種の店があって日用品や食料品は何でもすぐに手に入るという便利さはないので自家用車を持たねば生活はできないだろう。これはビスタやオーシャンサイドでも痛感したことである。この点、国土が狭いせいもあろうが、日本は実に物資の豊富な国で、どこの町へ行っても町中に商品が満ち溢れていると、かつて親友のカニングハム氏が感歎していたのを思い出しながら窓外の閑散とした風景をながめていた。

ドライブを終えて再び森の中のポマロイ家へ帰ったのは四時頃である。居間でくつろいでお茶を飲みながら、雑談を続ける。アリスは隣のクック家とのあいだを往来していたが、また居間に顔を出して、日本製カメラを持ち出した。見るとあるメーカーの一眼レフで、輸出向きに作られているカメラである。ここでもひとしきりカメラの話が出たが、彼女の説明によると日本製カメラは抜群であり、ドイツ製品などは問題ではないということで、これはお世辞ではなくて、アメリカ人の卒直な意見らしい。息子さんのアランもミノルタの一眼レフを持っていたが、ある日野外のベンチに置いてちょっと眼を離したすきに盗まれたと残念そうに話し、結局ロッコールズームレンズだけが残ったが、アタッチメントがあれば自分のカメラにも使用できるだろうと言う。

アリスは実に知的な女性で、文才に秀でた才女であることは大体にわかっていたが、その話ぶりによると社会万般に通じており、ずいぶん勉強もしたらしくて、博覧強記ということらしい。日本に関しても相当な知識を有しているが、なにかのはずみに、日本にはまだゲイシャガールが沢山いるのかと聞いたときはガックリきた。やはり日本の実態を十分に認識してはおらず、彼女のもつ日本のイメージは依然としてフジヤマ、ゲイシャの域を出ないようだ。彼女の日本への憧れが〝東洋の神秘〟的なものを一歩も出ないとすれば、その偏見を是正するようにこちらで努力しなくてはなるまいと思いながら憮然たる面持ちでぼんやりしていると、そろそろ夕食に行こうと言う。今夜は隣家のクック家で歓迎のディナーパーティーが開催されるのである。

一同仕度をととのえてぞろぞろと隣家へ向かう。入口を入ってすぐ左側がダイニングルームになっており、大きなテーブルを囲んで席につく。ホスト席にはクック氏、その向かい側にメリー、私は一方の側にアリスと並び、その反対側には宮内氏と塙君が座る。なかなかのご馳走だ。ク氏が少年犯罪について話されるの

●ポマロイ家の前にて。左より宮内氏，筆者，アリス，アラン，塙。

で、このとき警官であることが判明した。私が、むかし高校教員をやっていたと洩らすと、何を教えていたのかとメリーが尋ねるので、英語である、ただし〝私自身の英語〟であると答えると、一同が笑う。和気藹々たる雰囲気のなかにディナーも終わり、そのあと居間へ移動してここで全員の記念撮影をする。クック氏とメリー夫妻が互いに手を取り合って微笑しながら顔を見合わせるポーズをとるのを見ると、やはりアメリカ人だな、と思う。このあとふたたびアリスの家へ引き返して食堂でお茶を飲みながら雑談していると、赤いコートに蝶ネクタイをつけたご主人のポマロイ氏が出て来て、外出する旨をアリスに告げて彼女を抱き寄せ、頬にそっとキスをする。あとで聞いてみると、今夜は演奏会があるので、それに出演するのだという。客人たちの眼前で堂々と別れのキスをするなど、これもやはりアメリカ流であり、彼らにとってはごく普通のマナーなのだろうが、私たちには到底真似のできないことだ。日本人の対異性感覚がまだ未発達なのか、それとも根本的に人間観や倫理感が異なるのか、これも私にはわからない。

雑談を続けるうち、夜も更けたので一同は昨夜どおりにまたクック家へ行き、各自指定の部屋へ入って就寝することになった。私はまたクック夫妻のベッドを借用に及び、長々と体を伸ばした。

めまぐるしかった日々やアダムスキー関係の情報などを回想すると容易に眠れない。起き上がって窓のカーテンを少しあけると外は真っ暗闇で何も見えない。ベッドに腰かけて腕組みをしながら冥想にふけっていると、かすかにドアーをノックする音が聞こえる。行ってそっと開くと意外にもアリスが立っている。何事ならんと眼を丸くすると、ちょっと話したいことがあるから居間へ来いと言う。静かに居間へ入ってソファに腰をおろすと、アリスはアダムスキーのコンタクトについて小さな声で私を驚嘆させるような話をし始めた。ある種の秘話であって、カリフォルニアでも耳にしなかった内容である。もちろん口外はできないが、これは過去二十年に及ぶ私のささやかなアダムスキー問題普及活動を決定的に価値づけた情報であった。感謝してGood night. と言い残し、またベッドに入ったが、ますます興奮して眠れない。まんじりともせぬうちにいつのまにか夜が白々と明け始めた。

早目に起床して洗面をすませ、身仕度をととのえて、アリスの家へ行く。軽い朝食をすませて、十一時頃、いよいよ出発と相成った。食堂にいたとき、クック氏が警官の制服姿で挨拶に来られた。胸につけた金ピカの大きなバッジが美しく輝いている。ここでもクック氏はひとくさり少年犯罪について語ったが、こんな平和な田舎町でも青少年犯罪が増加してやりきれないと慨歎される。腰の拳銃を使用することがあるかと尋ねると、まだない、こいつを使うのは最後のときだ、しかし毎月一回射撃練習をするという。別れを告げてクック氏が出たあと、私たちも仕度をして外へ出た。入口の近くでポマロイ氏が待ち受けていて、私たちと

一人一人別れの握手を交わす。遠慮深い内気なこの老人に対して私はあまり言葉が出なかった。メリーが来ている。わいわい騒ぎながら荷物を車のトランクに入れていると、アランが〝彼女〟をつれて車でやって来た。ベティーという名の初めて見る可愛い娘さんだ。メリーに向かって丁重に挨拶したあと、アランにも挨拶し、そばのベティーにも別れの言葉を告げたが、どういうわけか何も言わず、奇妙なものを見るような顔つきで我々日本人の動作を見つめている。

さらばニューイングランド

アリスが運転する車に三人が乗り込んで、走り出した車内から後方を見ると、メリーが上半身を前にかがめながら、しきりに日本式のお辞儀をしている。サマになっていないが、その笑顔はひどく美しい。

車はノースボロの市街地を通過してボストンへのハイウェーを飛ばして行く。ハーバード大学を見学したかったが、時間の余裕がないだろうとアリスが言う。

約二時間後にボストン空港へ到着。時間が余ったので、ロビーのベンチに座って、くつろぎながらここでもアリスとしばらく話し合った。いつか日本へ行きたいと言うので、ぜひ来てくれ、大歓迎すると激励する。出発時間が刻々と迫ってくる。なにかやるせない気分に包まれて、いても立ってもいられなくなる。Farewell to New England!（さらばニューイングランド！）とつぶやくと、アリスも Good luck! Kubota, please——と言って声をつまらせるので、見ると涙が頬を流れている——。

アナウンスの声が響いたので私たちは立ち上がってゲートの方へ進んだ。最後の握手を交わそうとすると、アリスはスペース・ブラザーズ流の掌（てのひら）をくっつける仕草をするので私もそのとおりにする。双方とも微笑を浮かべたあと、私は奥の方へ歩いて行った。

飛行機が見えなくなるまで送迎デッキで見送るからというアリスの言葉を忘れずにいた私たちは、動き出した旅客機の窓からデッキの方を凝視していたが、どうしたことかアリスの姿が現れない。焦燥にかられていると、ついに機体は滑走を始めてニューヨークを目指し、急上昇して行った。

私はふたたびつぶやいた。Farewell to New England!——。

（完）

付記

後日アリスからの手紙で判明したことだが、彼女は屋上のデッキへ行こうとして大急ぎで階段を駈（か）け上がったけれども、デッキへ出るドアーが開かなかったためにまた駈け降りて、ロビーの窓から離陸状況を見つめていたという。旅客機が雲間に消えたあとも、しばらく大空から眼を離さなかったということだった。

× × ×

ボストンから約一時間後にニューヨークのケネディー空港へ着いた私たちは、十一月十三日まで滞在したが、その間、七番街のホテル・アメリカーナを根城にしてゆっくりと羽根を伸ばし、実に愉しい日々をすごした。たびたび宮内氏のアパートを訪れて、ここでGAP会員のグラフィックデザイナー大西氏や大日本印刷ニューヨーク出張所長の福永氏らと交歓したが、特に十日は福永氏の運転される車でロングアイランドへドライブに出た。同行者は宮内氏、塙君、私の三名である。目指すはオールド・ウェストベリー・マンション。これは閑静な地に残っている昔の富豪の大邸宅で、現在は市が管理して一般に公開されている。これが実は映画「ある愛の詩（うた）」の舞台になった名所だというので福永氏が特に行楽の目標にしたらしい。まだその映画を見ていなかった私は、むしろ先入観なしに多大の関心を持つことができた。

車で飛ばすこと一時間余、目的地の門から入って、途方もなく広大な敷地にまず驚いた。小さな町ぐらいはあるこの地所のまん中に大きな母屋が一軒ポツンと建てられて、あとはすべて庭園となっている。駐車場の近くにテーブルがあちこち置いてあり、家族づれの行楽客が弁当を開いて楽しく食事をしている。私たちも一台のテーブルを囲んで、啓子さんの心尽くしのおにぎりをパクつきながら愉快に語り合った。福永氏は早大政経出身の秀才で、アメリカ文化や政治問題等に関して該博な知識を持たれるので、その話は傾聴に価する。

そのあと裏の庭園を散策したが、尽きるともない広い敷地に見事な樹木や草花が充満しており、清浄な空気と相まって実に快適だ。むかし園遊会で着飾った婦人たちが優雅な物腰で佇（たたず）んだのであろう四阿（あずまや）に私たちも暫時休憩した。木々の紅葉が水面に美しく映えている。栄耀栄華の夢の跡にしばし佇立して人間の運命を想う。ここにはカルマというものの一大典型が存在するのだ。やはり精神が物質に先行するのか——。

周辺を逍遙すること二時間、ふたたび車に乗って今度はジョーンズ・ビーチへ行く。ここは魚釣り場として名高い行楽地である。到着してみると、いるわ、いるわ、数千人の客が詰めかけて、ごった返している。しかも日曜とはいえ霧が深くたちこめて海の遠望は不可能なのに、よくもまあ人が出るものだと福永氏も驚いている。すべて白人ばかりで、私たち以外に東洋人は全く見当たらない。感心したのは停泊している多数の釣り船で、すべて純白のペンキで美しく塗装してあり、汚れた船体は眼につかない。長い桟橋から釣り糸を垂れている人も多い。釣り竿は賃貸で、エサも売っている。

でっぷり肥えた中年の男が遠くから私を見て「ジャップ」と言ったのをこの耳でたしかに聞いたが、米国内の人種差別の実態をよく知らぬ私にはピンとこなかった。しかし一般米人は日本人に対してきわめて友好的であることもたしかである。読者も恐れることなく訪米されるとよい。

●庭園での団らん。

●四阿での宮内氏（左）と筆者

オールド・ウェストベリー・マンションにて

●左より宮内氏，筆者，福永氏，塙。

透視された謎のクリスタル・ペンダント

中里信彦

お忙しい中、その後お元気でお過ごしでしょうか。私の方は肉体的な不調はありますが、色々な楽しさが増え、一日一日が充実するようになってきました。

昨年の総会の時はまるで私も久保田先生と米国へ同行したような楽しい雰囲気で過ごさせて頂きました。GAPニューズレター57・58号も楽しい気分で総会時を思い起こしながら読ませて頂き、嬉しく思っています。

今年の月例会は四月、五月、七月と出席しましたが、五月の時に発表された亀田先生の所へ六月二十四日初めて訪問し、会う前はどんな方なのかと少々緊張の感がありましたが会った途端にそんなものはどこかへ行ってしまい、気さくで若々しいのに驚きました。あらかじめ用意していた八つの質問にも丁寧に答えて頂き、帰りぎわに六月二十六日に超能力療法公開実験ジョン・ケインにあなたも出席しませんかと誘われて、当日出席した時に、初めてジョン・ケイン氏の肩の辺に薄緑色のオーラを見ました。患者の一人の婦人の右肩にも同色のオーラを見ることができました。亀田先生に聞きましたところ、その色は親切心ではないかとのことでした。

私は亀田先生の持たれる超能力とは別に何か不思議な魅力を感じ、七月の十五、十六日にも訪ね、私自身の事や家族の事等で色々アドバイスを受けたり、先生の考案されたピラミッドからエネルギーを受ける方法を教わり、楽しく過ごしました。十六日にはちょっと興味深いことを発見されたので報告しますと、ニューズレター58号9頁の謎のクリスタル・ペンダントの写真を亀田先生に見せたところ、即座に「これは宇宙の物で地球の物ではありません。根拠はありませんが――」と答えられ、さらに「今、面白いものを見せてあげましょう」と言いながら拡大レンズでアダムスキーのペンダントの写真をのぞきながら、机上に置いてある紙に何かを書き出しました。

初めにまず下の写真（ペンダントの裏側）を見ながら図1のように人物像が出来上がってゆき、描き終わったところで「全部で七人の人物がいるから見てごらんなさい」とおっしゃるので、私も拡大レンズを借りて見たところ、数字で番号をふった①の二重丸のついた椅子に腰かけて左手を膝に置いた人と、③④の人、⑤の正座した人、②のあたりにダルマのような形をした人?が見え、亀田先生のおっしゃるところでは「皆手に何かを持っている。①の二重丸をつけた人物が中心人物である」ということです。

さらに今度は上の写真（ペンダントの表側）を見ながら、また描き始め、「非常に薄いが、前に水のある洋館が見える」と言われ、十分近くかかって図2にあるような三階あるいは屋根裏室のような建物が描き上がり、私も心を静めて見ましたが、左側に小さな家と、絵のほぼ中央に位置する屋根裏室のある建物の他にはあまり良く見えませんでした。

先生がおっしゃるには「左側の小さな家を壊して大きな家を建て直したらしい」。それに「今あなたが透視しているのは、あなた自身の力で見ているのではなく、私のエネルギーで透視しているんですよ」と言われました。

亀田先生の所でお話を聞いているとアッという間に時間が過ぎてしまいます。私も先生のような超能力を開発したいと思い、少しずつですが勉強中です。

話は変わりますが、56号までのジョドゥー・クリシュナムルティーの続きの部分をできたら連載して頂きたいのです。難解な部分もありますが、読めば読むほど新たな意義を感じさせられます。ぜひお願いいたします。

七月の月例会の時に、久保田先生は地震の事を話していましたが、六月二十四日に私が亀田先生に聞いたところによると、「××年の冬でない時期に房総沖地震、××年に遠州灘地震があるかもしれません。また訂正するかもしれませんが――」という話でした。

私は先生が以前話されたように、「絶対死なないという確信と、災厄の時にはその場所に絶対にいない」という心中のイメージ法を応用していますので心配はしていません。確かにこの頃は短期間内に世界で巨大地震が次々と発生していますが、私の家のまわりの小動物、鳥、虫たちもいつものように飛びまわっています。もしそれらが急にどこかへ移動し始めたら先生の所へ連絡（電話・電報）しましょう。その前に意識による印象が来るかもしれません。

この頃、特に実践・哲学の重要性を強く感じています。以前ニューズレター56号「声」欄に掲載された時の突破口は開かれた感じです。あとは私自身の実践いかんにかかっていると思っています。亀田先生はカードの透視が出来たって仕方がないとあっさり言われ、日常生活に応用しなければ何の利得もないと言われましたが、考えてみればそのとおりでただ初歩の段階としてカードからの方が入りやすいのだと私が言いましたところ、うなずいておられました。

先生は「UFOと宇宙」の発行やニューズレターの作成、毎日の手紙の整理等で恐らく馬車ウマ以上に働かれていることでしょうが、どうか季節の変わり目にお体を大切に頑張って下さい。

亀田先生に透視をお願いしてアドバイスを受けようとする方は、左記の項目を厳守して下さい。

(1)**住　所**　〒103東京都中央区日本橋浜町三―四―四八
（日本橋側から墨田川方向へ新大橋のたもとまで行き、右側数軒手前。地下鉄日比谷線「人形町」駅下車、徒歩十分）

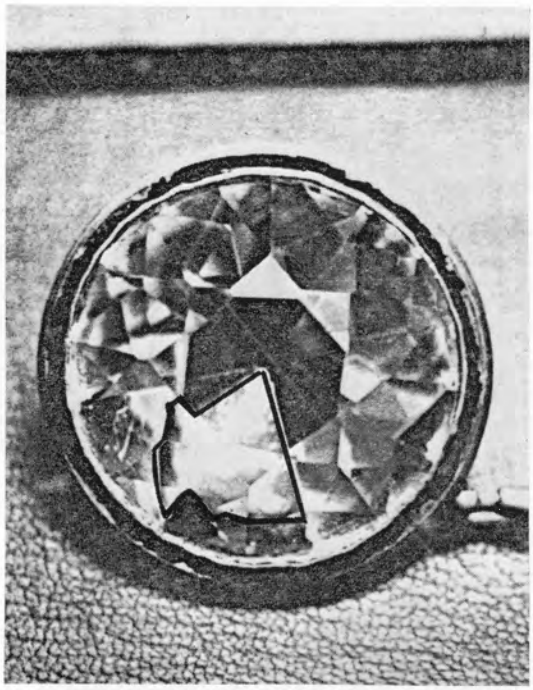
(2)**電　話**　六六六―六六二四

(3)**予　約**　あらかじめ電話をかけて秘書の方に日時を指定して頂き、その時刻の十分位前に本人が直接行くこと。絶対に予告なしに行かないこと。

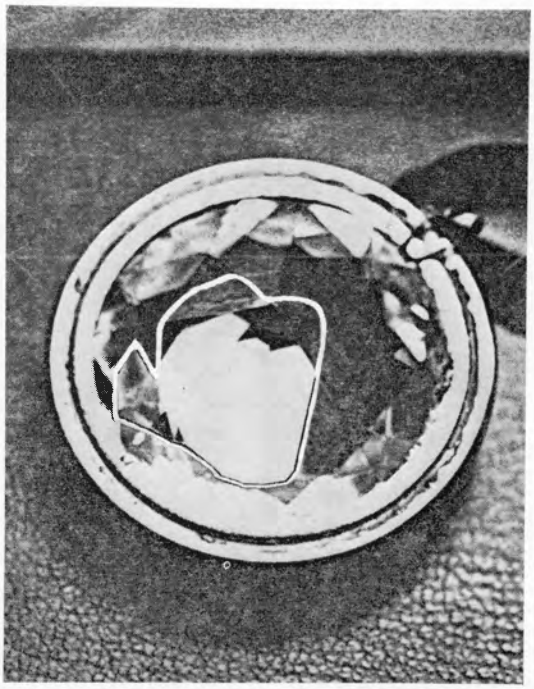
(4)**相談料**　一時間につき五千円。終了時に納入。

◎注意＝乳幼児を連れて行かぬこと。電話による予約時に「日本GAP機関誌で先生の紹介記事を見た」と告げること。また、電話だけで相談をもちかけないこと。たとえば電話をかけて「どこそこに大地震がいつ頃発生するか」というような質問は絶対に避けて下さい。遠隔地の方は手紙で質問を出して可なるも、なるべく簡潔に記し、関係者の写真（最近三ヵ月以内に撮影のもの）と現金五千円を同封して下さい。質問内容は人生問題全般に及びます（縁談、就職、進学、家屋新築の方位、病気治療の方法、紛失物、家出人の捜索、職業の適否、自己の運勢、寿命等何でもOK）。

(5)**著　書**　「透視術入門」亀田一弘著　¥五五〇　〒一六〇
〒160東京都新宿区愛住町19、虹ビル三〇三号　虹有社
だれでもできる透視能力開発法を詳述した、この種の図書中では白眉の解説書。まずこれを熟読されるようおすすめします。



●ペンダントの裏側。黒線で囲んだ部分が亀田先生による透視範囲。



●ペンダントの表側。白線で囲んだ部分が亀田先生による透視範囲。

●上の写真の範囲内に図のような光景を透視された。（亀田先生自筆スケッチ）

●上の写真の範囲内に図のような光景が見えるという。（亀田先生自筆スケッチ）

●記念すべきフェニックス・ガゼット紙

ジョージ・アダムスキー著「宇宙からの訪問者」（ユニバース出版社刊）第88頁に「11月24日にフェニックス・ガゼット紙が私と金星人とのコンタクトに関する記事を掲載したが、これには新聞社へ報告した四名の目撃者の写真も添えてあった。また足跡のスケッチ写真や非常に出来の悪い円盤写真も一緒に掲載された云々」とある。ここに掲げた写真こそまさにその新聞記事である。アリゾナ州グレンデール在住のＵＦＯ研究家・富川正弘氏が最近フェニックス市のガゼット社を訪れて記事コピーを入手し、編者に贈られたもの。レン・ウェルチ記者により四日前の事件が詳細に報じられている。

Flying Saucer 'Passenger' Declares A-Bomb Blasts Reason For Visits

By LEN WELCH

Fasten your safety belt, Buster, and take a firm grip on your chair for we are about to take off on a story to end all stories about flying saucers.

Woven into this incredible tale is what was reported to be probably the first person-to-person conversation with a man in a flying saucer, an explanation why flying saucers are flitting about our skies, a beautiful woman from another planet and mysterious footprints in the desert sands.

Few questions about flying saucers are left unanswered by this story that has its beginning on a lonely spot on the California desert between Parker, Ariz., and Desert Center, Calif.

ITS PRINCIPALS are four Arizonans out to get a look at a flying saucer: a Valley Center, Calif., "professor," his secretary, and another woman, both from Valley Center.

The Arizonans figuring in the story are George Williamson, 25, Prescott, an employe of the supply division procurement section at the United States Veterans Administration Hospital at Fort Whipple; Mrs. Williamson, a medical [illegible]

Is this a flying saucer or a freak cloud formation? Prof. George Adamski of Valley Center, Calif., gave the negative to Arizona friends, claiming he took the picture about 10 miles east of Desert Center, Calif., on the Desert Center-Parker Highway and later engaged in conversation [illegible]

fred C. Bailey, 53, of Winslow, for 17 years an employe of the Santa Fe Railway and now "braking" on passenger trains, and Mrs. Bailey.

Williamson's interest in flying saucers was intensified by stories of saucers he uncovered among Indian legends while doing independent research among the Chippewas.

"I had corresponded with Prof. George Adamski, formerly of Palomar Observatory near San Diego, and learned that he had made pictures of flying saucers," Williamson said. "We (my wife and the Baileys) decided to go on a picnic lunch with Professor Adamski in the hope that we would see a flying saucer."

THE GROUP in addition to the Williamsons, the Baileys and Professor Adamski included Alice K. Wells and Lucy R. McGinnis, the latter the professor's secretary, both of Valley Center.

We will now proceed chronologically with the fantastic story of events that occurred as pieced together from stories of the Baileys and Williamsons. This is their version.

The party [illegible]

NEGATIVES OF FLYING SAUCER INTRIGUE THEM

Gazette Staff Photo

Two negatives reported to show a flying saucer that appeared on the California desert intrigue (from left) Alfred C. Bailey, Mrs. Bailey, both of Winslow; George Williamson and Mrs. Williamson, both of Prescott. They claim they saw the mother ship of the flying saucer while on picnic.

A MESSAGE FROM SPACE?

A B

George Williams of Prescott is convinced that a man from space left a message in his footprints on the sand near the spot where he landed a flying saucer. Williams took plaster paris casts of footprints and from the casts copied designs on soles of slippers the man wore. At left is design made from cast of right foot and at right is design from cast of left foot.

●左からアルフレッド・C・ベイリーとその夫人、ジョージ・ウィリアムソンとその夫人。いずれも1952年12月20日の砂漠における劇的なコンタクト事件の証人である。

絶賛 増刷発売中！

改訳合本決定版

米ジョージ・アダムスキー財団より翻訳合本出版権獲得

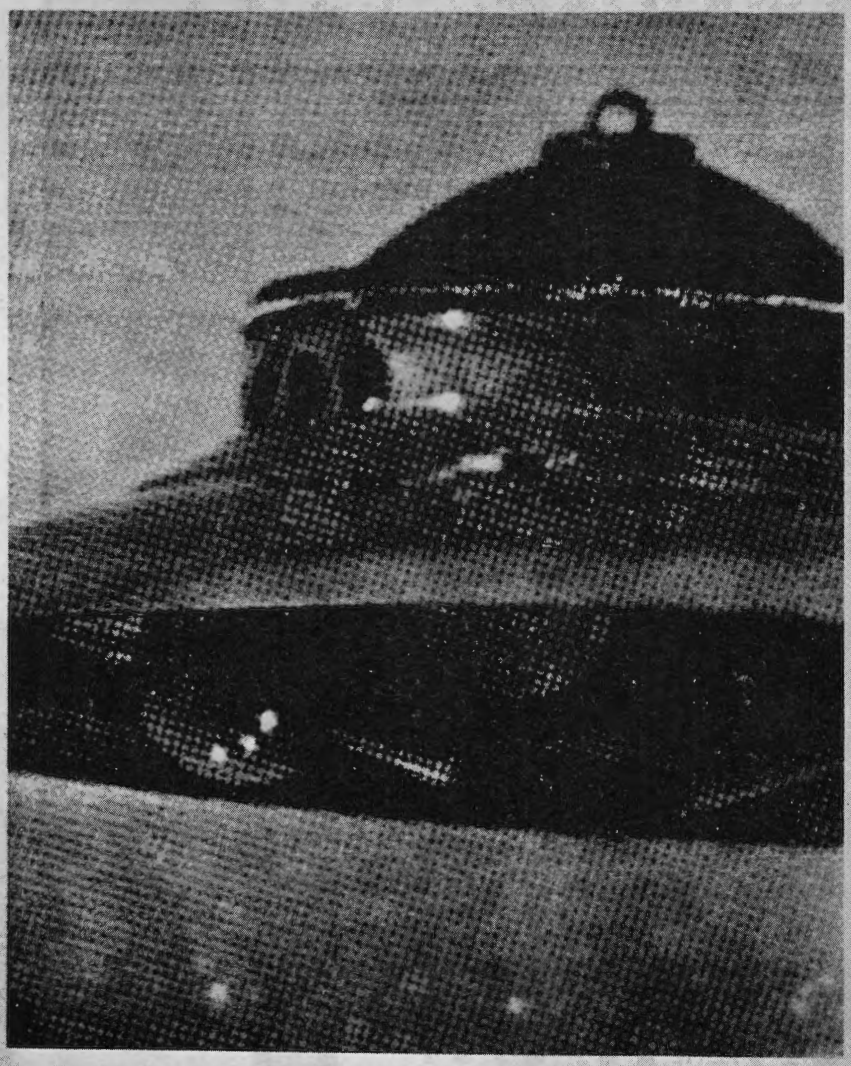
ジョージ・アダムスキー著 久保田八郎訳

宇宙からの訪問者

―偉大な惑星人との会見記―

定価1,300円〒160

●B6版342頁／本文厚手上質クリーム紙使用／写真頁極上コート紙使用／美麗カバー付保存版



●空飛ぶ円盤は実在する！　遠い惑星から偉大な進化をとげた人類が大宇宙船を駆って地球の救援に飛来する！壮大きわまりない宇宙空間の大スペクタクルと驚異的事実を伝えた本書はまさに20世紀最大のドキュメントであり、ＵＦＯ研究者のみならず全人類必読の永遠の古典である。

●本書はかって「空飛ぶ円盤実見記」・「空飛ぶ円盤同乗記」として知られた名高い２点の記録書をアダムスキー研究家として著名な久保田八郎が流麗平易な訳文により全面的に改訳、「実見記」の内、アダムスキーの手記と「同乗記」全文を合本として事件の理解を容易ならしめ、また未発表の写真類を加え50点以上の写真・図解を一挙掲載した。なかでも金星人オーソンの肖像写真、金星のシンボルマーク２点、その他の貴重な写真類は読者をして遥かなる惑星群に限りない憧憬と畏敬の念を抱かせるだろう。

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル　株式会社ユニバース出版社　電話(832)1341(代表) 振替・東京1-119478

私は円盤に乗った！

驚異のホワイトサンズ事件

ダニエル・フライ著／久保田八郎訳

一九五〇年七月四日夜、米ニューメキシコ州ホワイトサンズのロケット実験場に突如一機の円盤が着陸し、内部から響く不思議な声に誘われて乗り込んだ科学者フライは、ニューヨーク上空までを三十分間で往復する！ その間、円盤の推進法や宇宙人の故郷と超絶した科学、哀れな地球の現状等を知らされるというこの驚異的事実物語は、本誌第二号に掲載されて当時の読者を熱狂せしめたが、いま新装なった単行本として同著者によるすばらしい関連記事三篇をあわせ収録しあらためて読者に贈る！ UFO研究者必読の書。

付・宇宙人アランのメッセージ／進歩の曲がり道／原子・銀河系・理解

B6判
272頁
¥750
〒160

ユニバースUFOシリーズ

パプア島の円盤騒動

宇宙人の劇的出現事件

ノーマン・クラットウェル神父著／増野一郎訳

ニューギニア島パプアで一九五九年に一大UFO出現ブームが発生した。島内の各所に円盤が低空で降下し、堂々と姿を現したが、特にボイアナイにおける出現は劇的であった。地上数十メートルの位置に停止した円盤の上部から、数名の〝人間〟が、歓声をあげて手を振る島民たちに手を振ってこたえる。この驚異的事実を現地在住のクラットウェル神父が徹底的に調査報告し、大事件の全貌を克明に伝えたすばらしいドキュメント！ 更にフランスで発生した「火の玉UFO事件」と「多条光線を放つ円盤」他四篇を掲載した！

付・フランスの怪奇・火の玉UFO事件／多条光線を放つ円盤

B6判
268頁
¥750
〒160

ユニバースUFOシリーズ

書店にない場合はユニバース出版社へ直接ご注文ください。

UFOs & SPACE
隔月刊
UFOと宇宙 No.19
August 1976

目次

〈口絵写真〉玄海灘にサラ状物体飛来
●カラー 飛行機の窓からUFOキャッチ
星図にない天体が——
長楕円形の光体が移動
日本の宇宙開発

本誌特別取材
私はUFOを何度も見た！ 8
鬼才・横尾忠則氏が語る神秘的体験

スタンフォード大学での地球外文明共同研究 18

チャールズ・ムーディ軍曹 砂漠で円盤に誘拐される 中津要二 20
彼は宇宙人を殴り倒したのだが——

オットー・B・ワインダー
UFOのスポークスマン？ 26
●テッド・オーウェンスの予言を果たしてUFOが実現させたのか

航空機や船舶が不思議な消滅をとげる地域はバーミューダだけではない！
アイバン・サンダーソン
世界の12の"魔の墓場" 33

宇宙人はなぜ人類と正式に交流しないのか 坂元 邁 40

■あなたもできる巨大地震の予知
大地震は予知できるか 工学博士 内田秀男 44
1982年有史以来前例がないさそり座惑星直列で巨大地震が世界中に頻発か？

UFO、日本書紀に出現！ 伝法千登里 50

火星生物発見の旅 京都大学教授 理学博士 宮本正太郎 54
—米探索機ヴァイキング火星到達への期待—

UFO目撃レポート 60　UFO情報 66　科学ニュース 72

連載科学記事 レナード・クランプ
(続)宇宙・引力・空飛ぶ円盤(2) 79
空飛ぶ円盤は重力場推進方式で飛ぶ！ 英国の科学者クランプが画期的な推進法を発見、見事な理論を展開した。

声—OPINIONS 92　蚤の市（売ります・買います） 98

表紙写真
インド、ナギン湖上の横尾忠則氏。
(1976年5月6日)
写真＝倉橋 正

目次イラスト 松岡吉樹

定価 390円

ユニバース出版社
〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル
電話 (832)1341(代表) 振替 東京1-119478

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京本部、大阪支部、高知支部新潟支部、熊本支部の五ヵ所で毎月「月例研究会」を開催して宇宙哲学の研鑽、UFO研究、情報交換、テレパシー練習、会食（夕食）等を行い、会員の精神的向上と親睦を図っています。近辺の方はぜひご参加下さい。出席者は会員に限ります。

東京例会

1、日時　毎月第二土曜日、午後二時より六時まで。
2、会場　上野公園内「東京文化会館」四階会議室。電話（828）2111。国電上野駅の「公園口」下車改札口の真向かい。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから四階へ行く。
3、会費　二〇〇円。
4、携行品　テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」を持参。二時→三時＝「テレパシー」講義、三時→四時半＝代表挨拶・報告・テレパシー練習・休憩、四時半→六時＝自己紹介、研究発表、質疑応答。研究会終了後、同じ会場で希望者のみの夕食会を開催（食事代は各自持ち。四〇〇円程度）

★　★　★

大阪例会

1、日時　毎月第三日曜日、午後一時より五時まで。
2、会場　大阪府吹田市出口町四丁目、「吹田市民会館」電話（388）7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。
3、会費　一〇〇円。
4、携行品　テキストとして「宇宙哲学（たま出版刊）」「生命の科学（文久書林刊）」を持参。

★　★　★

高知例会

1、日時　毎月第一日曜日、午前十時より。
2、会場　高知市桟橋通り二―一―五五、「青年センター」電話（31）4931。
3、会費　一〇〇円。
4、携行品　テキストとして「生命の科学」

★　★　★

新潟例会

会場不定につき近辺の方は足立氏宛ご連絡下さい。
足立亘宏　新潟市五十嵐中島二九四三　電話（62）0968（夜間のみ）

熊本例会

1、日時　毎月第三日曜日、午後二時より五時まで。（ただし十一月だけは第四日曜日）
2、会場　熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。電話（55）5235。国鉄熊本駅前から市電「健軍」行き乗車、「お城前」下車。同交叉点左折、徒歩二分。
3、会費　一〇〇円。
4、携行品　テキストとして「テレパシー（文久書林刊）」「生命の科学（同）」二時→三時　久保田代表の東京例会における「テレパシー講義（録音）」、三時→五時　自己紹介、座談、質疑応答。

● 7月10日，東京文化会館における日本GAP東京月例研究会。

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

¥750　〒160

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述

テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

¥450　〒160　　¥550　〒160

絶賛！ アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！　¥650　〒160

文久書林　東京都文京区白山1－29－12　振替・東京2521 Tel.(813)2495

①

②

①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500〒100 ②¥200〒50 一括注文の場合〒100

編集後記

■お待たせいたしました。ここにやっと59号をお送りできて、一息ついています。今回の発行費用は約五十万円、物価高騰の折から容易ではありませんが、挫折することは絶対にありませんから、ご安心下さい。本誌は編者みずからレイアウトやタイトル部分の写真植字貼込み等を行いますので、その分だけ費用を浮かしています。このタイトル版(はんした)下を記念に差し上げますから、希望者はハガキでご一報下さい。

■本号でもって「進歩した思索家のために」が完結しました。次号からア氏のすばらしい講演録を連載します。これは一九六五年四月、ア氏が死去の数日前にデトロイトで行った最後の講演で、テープから流れる迫力に満ちた堂々たる声は圧倒的であり、けだし絶冠というべきでしょう。ご期待下さい。

■好評を頂いた「米国GAP訪問記」も終わりました。これは他の数篇を加えて単行本化する予定です。実現の見通しがついたらお知らせしましょう。

■本号には大透視能力者・亀田一弘先生から頂いた随想の一部を掲載しました。先生いわく「過去、無数の人に接触したが、GAP(ジーエイピー)の会員の人達が精神的に最も優秀だ」と。透視によるアドバイスを受ける方は事前に本号該記事の注意事項を熟読してからご訪問下さい。

■近来、東京月例研究会は出席者が毎回平均百五十名位となり、会場が狭隘(きょうあい)化し、いささか窮屈になりましたが、これに代わる広い会場が見つかりませんので、当分の間、従来どおり東京文化会館四階大会議室を使用します。当日は早目にご来場下さい。今秋の総会もここで実施しますが、詳細は事前にご通知します。

■その他、大阪支部、高知支部、新潟支部等でも月例研究会が開催され、活発な活動が展開しています。地元の方はふるってご参加下さい。

■去る四月十八日の大阪支部月例会には編者も出席し、米国GAP訪問スライド三百枚を映写、講演を行い、出席者約三十名との座談とともに和気藹々(あいあい)裏に終了しました。関係者各位に深謝いたします。この例会は会場が狭いために広報しませんでした。ご了解下さい。

■九月中旬より二週間、編者は会社の出張でヨーロッパ各国を歴訪し、大量の資料を入手しますが、途中、スイスのジュネーブで、かつてア氏の高弟であったルウ・チンシュタック女史に会い、情報・資料の交換を行うべく連絡中です。本誌次号にはこれに関する記事が掲載できると思いますので、ご期待下さい。ア氏がヨーロッパ旅行の途次、バチカン宮殿で法王ヨハネ二十三世に会見し、スペース・ブラザーより預かった包み物を手渡したあと、法王より黄金のメダルを授与されたことは周知の事実ですが、そのとき宮殿入口まで通訳として同行したのがルウで、横の入口から顔を出してア氏を迎えた〝僧衣の男〟を見てア氏が「ああ、あの人だ！」と叫んで歩み寄り、中へ一緒に入るのを彼女は目撃していたといわれています。この〝僧衣の男〟は謎の人物で、一説によればブラザーだということになっています。

■ご質問・ご意見があれば手紙で遠慮なくお寄せ下さい。皆様のご協力に深謝します。

■ご送金は当方の事情により書留にしないで必ず振替でお願いします。当会宛のあらゆる郵便物には会員番号を書き添えて下さい。

GAPニューズレター　59号

編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

〒133　東京都江戸川区本一色町365－818

振替東京4－35912(久保田八郎名儀)

August 30 1976

頒価300円・送料200円